山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 264 集

寺前遺跡

中部横断自動車道南部インター建設事業に伴う発掘調査報告

2009. 12

山梨県教育委員会

国土交通省関東地方整備局

寺　前　遺　跡

中部横断自動車道南部インター建設に伴う発掘調査報告

2009．12月

山　梨　県　教　育　委　員　会
国土交通省関東地方整備局

寺前遺跡とその周辺 1（南から富士川を望む）

寺前遺跡とその周辺 2（東から調査区を望む）

寺前遺跡とその周辺 3 （西から富士川を望む）

寺前遺跡の土層（TP 1）

寺前遺跡の土層（TP２）

寺前遺跡の土層（TP３）

あらまし

南部町は、平成15年３月１日に富沢町と南部町が合併して誕生した町で、山梨県の最南端に位置しています。県庁所在地の甲府からは南へ約60ｋｍの所にあり、標高は157ｍ前後で平均気温は15度と高く、温暖でとても過ごしやすい町です。

この町には、県内の旧石器時代を代表する万沢地内の天神堂（てんじんどう）遺跡を初めとして、本郷地区には、お茶畑の広がる地区に原間（はらま）遺跡があります。中世では旧富沢町の福士にある真篠城（まじのじょう）跡があります。

天神堂遺跡から出土した旧石器時代の遺物は、県の考古資料として平成16年５月６日、1034点が指定を受け、真篠城跡は戦国時代の城郭として県の史跡に指定されています。原間遺跡は、本郷地区ではもちろんのこと町内でも有名な周知された縄文時代の遺跡です。

旧南部町では、51カ所の遺跡が周知されており、旧富沢町では、山梨県の遺跡台帳によると51カ所が存在しています。ですから、南部町全体では、102カ所の遺跡があります。今回、発掘調査された寺前遺跡を含めると103カ所の遺跡となりました。

さて、本書の寺前遺跡ですが、南部町から市川三郷町までの約28ｋｍが国土交通省と山梨県による「新直轄方式区間」で、中部横断自動車道南部インター建設に先立ち平成20年６月に試掘調査が行われました。

その結果、掘り窪めた穴（土坑）や土器（遺物）などが発見されたことにより、発掘調査を実施することとなりました。発掘調査は、同年10月14日から開始され12月９日まで行われ、試掘確認調査も実施されました。

左下の写真は、土坑の中の土を掘っているところです。小さい穴の中に入っての作業ですから、動きづらくてちょっと大変です。右下の写真は、土坑を掘りあげた状況です。

小石がたくさん写っていますが、もともと土の中に入っている石です。左の写真を見ると、地面の上には小石がありませんが、ちょっと掘り下げると小石がごろごろと出てくるのがよくわかります。

狭い穴の中に入っての作業ですから、前に進めず、後ろにも行けず、振り向くことも困難な状況です。

下の写真は、発掘調査作業の全体写真ですが、一つ一つの遺構（土坑や溝など）を掘削したり、遺構の図面作成を行ったりしているところです。地元の皆さんのご協力を得て、作業を進めることができました。

発掘作業が初めての皆さんでしたが、測量器械を使って目盛りを読んで頂いたり、図面作成のお手伝いをして頂いたりしてとても助かりました。

ありがとうございました。

今回の発掘調査成果ですが、縄文時代と中世と思われる地面を掘り窪めた穴（土坑）が12基と溝が２条、地面が焼かれた跡（焼土遺構）１基などが発見されました。また、遺物は小破片の土器と石器数点と極めて少ない出土でしたが、発見された遺構などから考えてみますと、住居跡の存在がないこと、狩猟の場所ではないことなどから、本遺跡の周辺には小さいながらも縄文時代の集落を想定することのできる遺跡でした。

発掘調査も終了し、年も明けた３月17日に寺前遺跡へ行ってみました。左下の写真が調査中の状況です。遺跡を西から東の富士川方向に撮影した写真です。右下の写真が工事中の状況で、国道52号線から直接入ることができるように広くつくられています。最終的には、南部インターへ通ずる道となります。本文中の第２図の工事図面で、左が西側、右が東側になっています。

３月21日には、南部町中野の南部インターチェンジ（仮称）建設予定地内で起工式が行われ、日本海と太平洋をつなぐ重要な道路基盤となります。

序

本書は、国土交通省と山梨県による「新直轄方式区間」約28ｋｍ（南部町から市川三郷町まで）の中部横断自動車道建設事業の内、南部インター建設に伴う寺前遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

平成19年２月に計画路線内の現地踏査を行い、中野地区周辺では発掘調査が行われておらず、「地形などを考えた上で試掘を実施する必要性がある」と国土交通省と学術文化財課へ報告したところです。

そして用地の取得後に、建設予定地内での試掘調査を平成20年６月から開始し、南部インター建設部分において新たに遺跡の発見があり、遺跡名を「寺前遺跡」と付しました。

発掘調査当初は、慈眼寺の東側正面ということもあって、寺院関連の遺構が見つかるのではないかと想像されましたが、実際に調査を実施してみますと、打製石斧や縄文土器片、中世の陶器片などが見つかりました。また、遺構につきましては、縄文時代の土坑や中世と思われる土坑、溝２条、地面が焼かれた焼土遺構などが調査されました。

このような遺物から考えて、発見された遺構は縄文時代を中心としたものと想像されます。しかし、住居跡などが見つかっていないことから、おそらくこの周辺に縄文時代の小規模ではありますが、集落の存在が想定されるところです。

南部町には周知の遺跡が多くあり、今後も予定路線地では遺跡の有無を確認するための試掘調査等が実施されます。そのため、今後新たに発見される遺跡も増加することと思います。

こうした発掘調査の成果が、南部町の歴史を解き明かすことに貢献できれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書作成にあたり、さまざまなご協力をいただいた関係者や関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成21年５月30日

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　　小野 正文

例　言

1．本書は、山梨県南巨摩郡南部町中野字寺前地内に所在する寺前遺跡の発掘調査報告書である。
2．書籍名は『寺前遺跡』であり、副題は「中部横断自動車道南部インター建設に伴う発掘調査報告書」である。
3．「寺前遺跡」は、平成20年6月に山梨県埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という）が実施した試掘調査によってみつかり、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録された名称である。
4．本書掲載内容は、寺前遺跡発見までの経緯と中部横断自動車道南部インター建設に伴い埋文センターが平成20年度に実施した発掘調査成果をまとめたものである。
5．調査及び報告書刊行までの作業は、国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所からの委託を山梨県教育委員会が受け、埋文センターが担当した。
6．寺前遺跡に関わる発掘調査は、平成20年２月18日～20日・３月７日、６月16日～20日の期間に試掘調査を実施し、本調査を平成20年10月14日～12月９日の期間でおこなった。
7．本書刊行までの作業は、平成20年12月10日～平成21年５月30日までの期間に埋文センター内にて実施した。
8．本書に掲載した遺構・遺物・作業状況写真は、山本茂樹・上原健弥が撮影した。
9．本書に掲載した遺跡空中写真・図化作業は株式会社シン技術コンサルに委託した。
10．発掘調査に関わる世界測地系座標・グリッドポイント設定・基準標高測量は、株式会社一瀬調査設計に委託した。
11．調査に関わる写真・記録類は埋文センター、遺物は山梨県立考古博物館で保管・活用している。
12．本書の編集は、埋文センター副主幹文化財主事山本茂樹・非常勤嘱託上原健弥がおこなった。
13．また、執筆の分担は次のとおりである。
山本茂樹：あらまし、第１章、第２章、第４章の遺構について
上原健弥：第３章、第４章の遺物について、第５章・写真図版
14．本書刊行に関わる整理作業（実測・図化・編集・校正等）の主な分担は以下のとおりである。
遺物洗浄・注記・・・・・・・・・山本茂樹
遺物写真・・・・・・・・・・・・上原健弥
遺物実測・拓本・トレース・・・上原健弥
遺構図トレース・・・・・・・・・山本茂樹・上原健弥
図版作成・・・・・・・・・・・・山本茂樹・上原健弥
写真図版作成・・・・・・・・・・上原健弥
表作成・・・・・・・・・・・・・上原健弥
15．本書刊行にあたり、次の組織や方々から指導・助言および協力を戴いた。記して謝意を表する。
南部町教育委員会・新津健・保坂和博・石神孝子・網倉邦生（順不同・敬称略）

凡　例

1．本文中に頻繁に使われる組織名やその他の用語については重複をさけるため各用語の最初の部分で（以下、省略名）と断り省略している。

2．本書中には、発掘調査に関わる用語の記載が複数あるが、その使い分けは以下の通りである。

試掘調査：遺跡の有無を確認することを第一の目的とした発掘調査

試掘確認調査：周知の埋蔵文化財包蔵地内において、発掘調査の必要性や調査に必要となる期間や経費等の積算基準となるデータを収集することを主眼とした発掘調査

本調査：調査対象地内の全面を掘削し、埋蔵文化財を記録保存するためにおこなう発掘調査

3．本書中に記載されている遺構名は、本調査時の名称を用いている。なお、試掘調査時の呼称との対応関係については第２表の下方に記載した。

4．掲載されている図版のスケール、方位、スクリーントーンの用例は必要に応じて図中に示した。

5．掲載した図面の縮尺は、原則として以下の通りである。

遺跡関連：中部横断自動車道路線図など　1/50,000　遺跡位置図　1/25,000　工事図面　1/1,000

グリッド設定図　1/200　　基本土層図　1/20

遺構図：平面図　1/40　　断面図　1/40

遺物関連：土器類　1/2　　石器・剥片類　1/3

6．遺構図に示した方位（N）は磁北で、全体図に示した方位（N）は、国土座標による真北である。

7．遺構図版中のスクリーントーンは、焼土検出範囲を示す。

8．石器実測図は3面展開を基本とし、必要に応じて刃部などの面の展開図を作成した。

9．調査区図（第10図）に示した等高線の間隔は、10cmである。

10．第４表及び第５表中に記載した色調は、「農林水産省農林水産技術会議事務局監修　2001.1『新版　標準土色帖』」を参考にした。

11．第5表の重さはグラム（g）で、小数点第２位以下を四捨五入した。

12．各章の参考文献は、それぞれの章末に記した。

目　次

口絵
あらまし
序
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査までの協議と調査経過 …… 1
　第３節　調査組織 …… 2

第２章　地理的環境と歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の方法と基本層位
　第１節　調査の方法 …… 8
　第２節　基本層位 …… 8

第４章　検出された遺構と遺物
　第１節　土坑について …… 11
　第２節　焼土遺構について …… 12
　第３節　溝について …… 13
　第４節　遺構外出土遺物について …… 13

第５章　まとめ
　第１節　調査成果について …… 19
　第２節　データ一覧（遺構・遺物）…… 20

写真図版 …… 25

抄録

挿図目次

第１図　中部横断自動車道路線図（平成18年４月）及び南部町内の遺跡分布図 ……５－６
第２図　寺前遺跡位置図 ……7
第３図　グリッド設定図 ……9
第４図　基本土層図と土層注記 ……10
第５図　検出遺構（１～４号土坑）……14
第６図　検出遺構（５～８号土坑）……15
第７図　検出遺構（９・10・12号土坑）……16
第８図　検出遺構（焼土遺構・１～２号溝）……17
第９図　出土遺物 ……18
第10図　調査区の地形と遺構・遺物の位置 ……23－24

表目次

第１表　遺跡地名一覧 ……4
第２表　土坑と焼土遺構の一覧 ……20
第３表　溝状遺構の一覧……20
第４表　土器・陶磁器の一覧……21
第５表　石器の一覧……22

写真目次

図版１　調査区全景 ……26
図版２　調査区内の状況１ ……27
図版３　調査区内の状況２ ……28
図版４　遺構１（１～３号土坑）……29
図版５　遺構２（４～６号土坑）……30
図版６　遺構３（７～９号土坑）……31
図版７　遺構４（９～12号土坑）……32
図版８　遺構５（焼土遺構）……33
図版９　遺構６（１・２号溝）……34
図版10　出土遺物１（縄文土器）……35
図版11　出土遺物２（須恵器・陶器・石器）……36

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

中部横断自動車道は、国土交通省の「新直轄方式区間」約28km（南部町を起点として市川三郷町の旧六郷町宮原地区まで）と中日本高速道路株式会社の「有料道路方式区間」（宮原地区から双葉ジャンクションまでの区間）によって計画が進められてきた。有料道路区間については、既に双葉ジャンクションから増穂町インターまで完成されており、今後増穂インターから宮原地区までが計画されている。

新直轄方式区間である市川三郷町から南部町については、平成19年２月に計画路線内の現地踏査を実施した。区間内では、トンネルや切り盛り土、高架橋などが建設予定されているため、路線内をほぼ忠実に踏査を行った。しかし、山林がほとんどであったため落ち葉などが多く、遺物などの発見には至っていない。

現地踏査は、このような状況であったため、遺跡分布図及び地形等を考慮しながら実施し、試掘調査を必要とする場所については、報告書を国土交通省へ提出した。南部町地内では、南部インター建設事業があり、国土交通省による用地の取得後、県学術文化財課に試掘調査が依頼された。

第２節　調査までの協議と調査経過

埋文センターは、平成20年６月16日から20日までの５日間、中部横断自動車道南部インター建設予定地である14,000㎡の内の365㎡を対象に試掘調査を実施した。その結果、慈眼寺東側の約1,600㎡の範囲で縄文時代の遺構や遺物がみつかり、字名を付して「寺前遺跡」とした。発掘調査（以下、本調査という）に向けて国土交通省甲府河川国道事務所と学術文化財課との協議が進んで行く中で、中部横断自動車道の本線工事及び南部インター建設に速やかに着手するため、緊急に本調査の対応が必要となった。

平成20年８月４日、国土交通省甲府河川国道事務所、学術文化財課および埋文センターを交え、本調査のため現地協議を行った。調査対象敷地内にある家の移転、調査範囲、駐車場、プレハブの設置および廃土置場などについて協議し、10月より本調査を実施することとなった。

本調査は、10月14日から11月19日まで重機による表土掘削を実施した後、人力による遺構確認を行った。確認後、遺構掘削、図面作成、遺構写真、空中撮影を実施した。寺前遺跡の本調査終了後は、中部横断自動車道建設事業に伴う試掘確認調査を同じく南部町内で実施した。

以下に、一連の経過を記す。

試掘調査

平成20年１月９日	試掘調査に関する現地協議を国土交通省・学術文化財課を交え実施
２月18日	南部IC予定地内において２月18日～20日・３月７日の日程で試掘調査を開始 茶畑（寺前遺跡地内）で遺構がみつかり、当該地内の茶の木の抜木後に再度試掘調査が必要であることが報告された
平成20年５月２日	試掘報告を受け、再度試掘調査に関わる現地協議を国土交通省・学術文化財課と実施
６月16日	南部IC予定地内において６月16日～20日の日程で試掘調査を実施 茶畑部分（寺前遺跡）で本調査の必要性が確認された 教埋文第163号にて文化財保護法第99条第１項に基づく発掘調査の報告を提出
６月24日	教埋文第163号-２にて文化財保護法第97条第１項に基づく遺跡発見通知の提出、 教埋文第163号-３にて文化財保護法第100条第２項に基づく発見通知を提出

本調査

平成20年８月４日　本調査についての現地事前協議実施
10月９日　作業員面接
10月14日　現地へ機材を搬入
10月15日　10月22日まで重機による表土掘削
教埋文第460号にて文化財保護法第99条第１項に基づく発掘調査の報告を提出
10月17日　安全管理点検日
10月27日　調査区内に測量杭設置
11月17日　安全管理点検日
11月18日　空中撮影及び慈眼寺裏の試掘確認調査実施
11月19日　寺前遺跡の基本土層図作成と土坑の埋戻しを行ない、本調査終了
慈眼寺裏の試掘確認調査終了、原間・大神遺跡の試掘確認調査開始
12月２日　原間遺跡及び大神遺跡の試掘確認調査終了
12月３日　器材の洗浄など撤収作業
12月９日　プレハブ撤収、寺前遺跡本調査及び試掘確認調査終了
12月10日　教埋文第583号にて文化財保護法第100条第２項に基づく発見通知を提出
12月17日　教埋文第609号にて発掘調査終了報告を提出
平成21年１月７日　整理作業開始
２月５日　教埋文第683号にて実績報告を提出
３月31日　20年度の整理作業終了
４月２日　21年度の整理作業開始
10月１日　入校
12月25日　刊行

第３節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
所長　新津健　　次長　小野正文　　調査研究課長　小林広和
調査担当者　山本茂樹・上原健弥
発掘調査作業員　佐野欣二、佐野政紀、佐野正之、坂主範子、小沢利一、遠藤重子、寺田美智子、仲澤清祥、仲澤昇子、望月久夫、望月広子、大窪良子
＊この調査組織にて、中部横断自動車道（南部区間）建設事業に伴う試掘確認調査を次の地点でも実施した。
１南巨摩郡南部町中野4171番地ほか（慈眼寺裏）　平成20年11月18、19日
２南巨摩郡南部町本郷字原間309番地ほか（原間遺跡）平成20年11月19日～12月３日
３南部町本郷字上大神366番地ほか（大神遺跡）　平成20年11月19日～12月３日
整理作業　山本茂樹・上原健弥
＊整理作業については、遺構数や出土遺物が少なかったことから、当該年度に担当者が遺物の整理や遺構のトレース、図版組、原稿執筆などを行った。なお、遺跡の全体図や空中撮影については、業務委託で対応した。20年度事業の残務については、21年度に継続し５月まで実施した。

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１節　地理的環境

寺前遺跡は、山梨県の最南端に位置する南巨摩郡南部町中野地内に所在し、標高は157mである。県庁所在地の甲府からは南へ約60kmの所にあり、平均気温は15度と温暖で降水量が多く、お茶の産地としても有名で風光明媚な場所である。町の西側には、標高1,719mを測る十枚山や1,394mの篠井山などの山梨県南西部と静岡県北部をまたがる身延山地、東に1,030mの思親山などの天子山地に挟まれる。そして、そのほぼ中央に富士川が流れ、山に囲まれた南部町は、町の約9割が森林地帯である。

JR身延線は、富士山と赤石山脈に挟まれた富士川の左岸を走り、南部町区間は特に山岳の路線である。そして、身延町を過ぎ市川三郷町へと続きここまでは富士川の左岸を通ることとなる。中部横断自動車道の新直轄区間は、市川三郷町から南部町の約28kmである。特に、富士川を横切るまで山岳であるため、トンネルや切り土などの工法で検討がなされている。

第２節　歴史的環境

南部町は、平成15年に南部町と富沢町が合併してできた町名であり、県内ではこの地域を含めて峡南と呼ばれている。本遺跡のある南部町は、国道52号線やJR身延線が通る町で、山梨県と静岡県とを結ぶ交通の要衝となっている。往時は富士川舟運の港町として、また駿州往還の宿場町として山梨県と静岡県の各地との交流が行われる中で繁栄を極めた。南部は、鰍沢へは９里、岩淵へは９里の中継地点にあり、富士川舟運上の要地として栄えてきた町でもある。本町は、奥州に勢力を誇り一時代を築いた南部氏発祥の地として歴史のある町でもある。

旧南部町内での遺跡は、現行の遺跡台帳で51遺跡となっており、その内訳は、旧石器時代が１、縄文時代が17、古墳時代が１、奈良・平安時代が２、中世・近世が35となっている。そして寺前遺跡が新たに加わり52遺跡となった。また、旧富沢町内では県の遺跡台帳によると51遺跡が明らかとなっており、その内容については、旧石器時代が７、縄文時代が36，弥生時代が３、古墳時代が２、古代から中世にかけては18、近世が７となっている。これらの内で時代が重複する遺跡もあるが、南部町全体での遺跡総数は、103となった。

本遺跡が存在する中野地区では、４遺跡が周知化されており、谷を挟んだ南の台地には中・近世の清水原遺跡が、北には縄文時代の北原遺跡、和田原遺跡がある。特に、本遺跡の南に位置する本郷地区では、縄文時代を中心とした大集落が想定される原間遺跡が存在している。多くの遺物が表採され地元でも有名なこの遺跡は、現在お茶畑となっている。この原間遺跡には、同じく縄文時代の遺跡である大神遺跡が隣接している。

遺跡が分布している場所は、富士川沿岸とその支流に面する地域で河岸段丘上に存在する。

南部町福士にある真篠城跡は、戦国時代の城郭で県史跡に指定されている。また、万沢地内には天神堂遺跡が存在しており、旧石器時代の遺物も確認され、町の史跡として指定されている。なお、旧石器時代の遺物については、県の考古資料として平成16年５月６日に1,034点が指定を受けている。

今回、寺前遺跡の発掘調査後に、中部横断自動車道建設工事計画に基づき、用地の取得された原間遺跡と大神遺跡を合わせて12,000㎡の試掘確認調査を実施した。その結果、原間遺跡においては、縄文時代前期から後期にかけての土器片が採取され、遺構が確認されたことにより本調査実施の必要性を国土交通省へ報告した。

南部町の遺跡地名一覧表（旧 南部町）（南部町誌より）

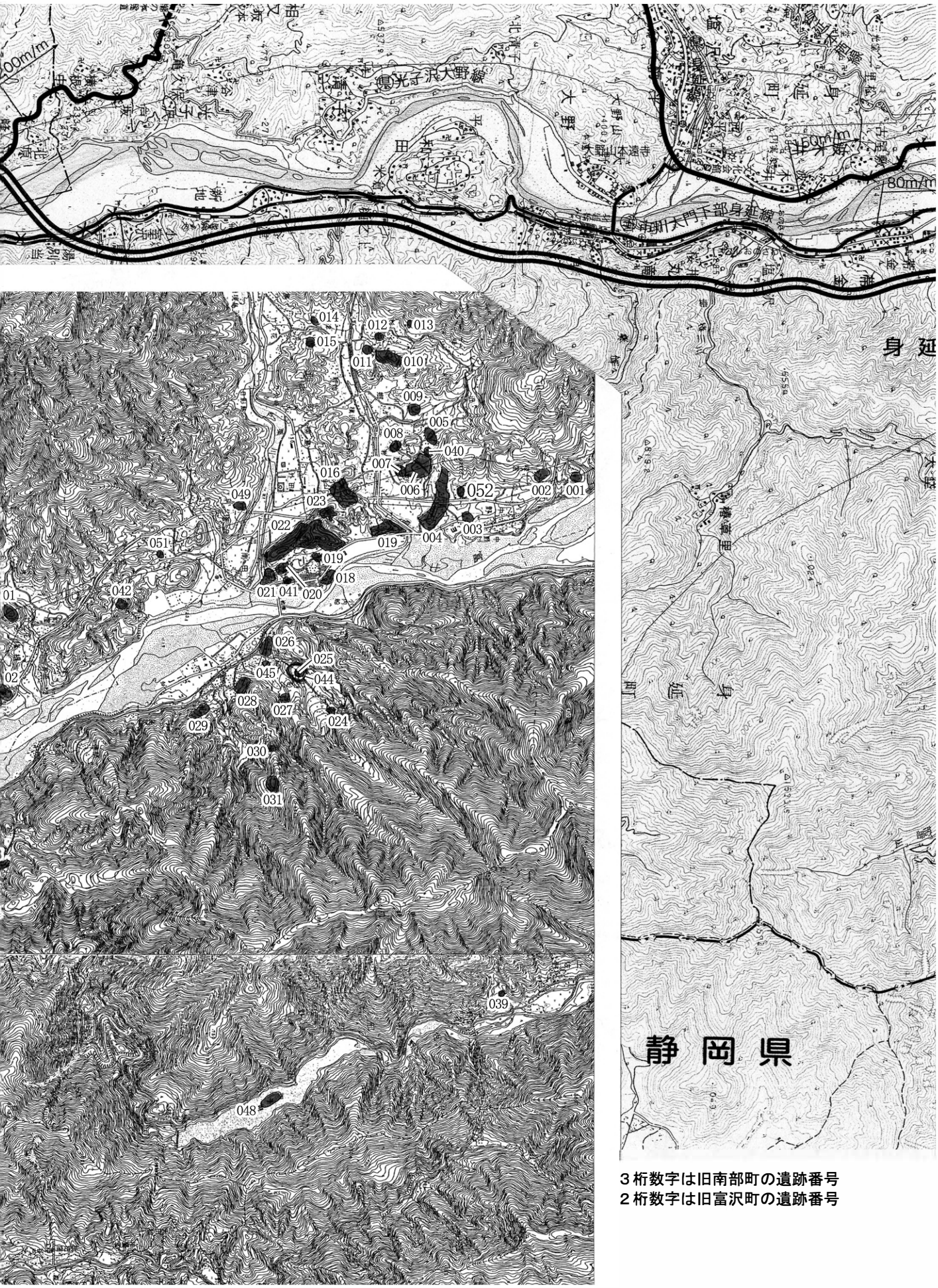
番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備　　考
001	北原	中野字北原1301他	縄文・近世	
002	和田原	中野字和田原1575-1他	縄文	
003	石塚	中野字古林2881他	近世	
004	清水原	中野字清水原4812他	中世・近世	
005	上原間	本郷字上原間1341他	旧石器・縄文	
006	原間	本郷字原間309他	縄文・古墳・平安	
007	大神	本郷字上大神366他	縄文	
008	治家廃寺	本郷字治家366他	近世	
009	妙円寺跡	本郷字小川4140他	近世	
010	峯の城跡	本郷字矢下7768他	中世	
011	法泉寺	本郷字下杉尾8062他	近世	
012	上杉尾	本郷字上杉尾7970-2他		経塚？
013	矢下	本郷字矢下7365他		石塚
014	富ヶ谷	成島字富ヶ谷3406他	近世	
015	上の山	成島字豊ヶ峯9323他	縄文	
016	坂本	南部字坂本6019他	中世・近世	墳墓群
017	御崎原	南部字御崎原7521他	縄文・中世・近世	
018	南部氏館跡	南部字老瀬8245-2他	中世	
019	上ノ山	南部字上の山8647他	中世	
020	追平窯跡	南部字上の山8832-1他	中世・近世	
021	追平	南部追平9030他	縄文	消滅
022	城山	南部字上の山8899他	中世	
023	古城山	南部字古城山6218他	中世	
024	富岡	内船字富岡3379他	近世	
025	寺廻り	内船字寺廻3599他	縄文	
026	馬場道上	内船字馬場道上　他	縄文	
027	宝生	内船字宝生5580他	近世	
028	宇上	内船字宇上7273他	縄文	
029	中尾	内船字中尾9911他	中世・近世	
030	倉ヶ平	内船字下倉ヶ平6045他	中世？	
031	倉ヶ平東	内船字上倉ヶ平5859他	近世	
032	札鳥	井出字札鳥2278他	縄文	
033	東八木沢	内船字東八木沢12907他	縄文	八木沢Ａ
034	東畑	井出字東畑2611他	縄文	八木沢Ｂ
035	井出城山	井出字城山2960他	中世	烽火台
036	上の段	十島字上の段2285他	縄文	
037	葛谷砦	十島字峠2329他	中世	消滅
038	葛谷峠経塚	十島字峠1868他	近世	一字一石経塚消滅
039	大越山	上佐野字大越山1610他	中世	
040	原間経塚	本郷字原間329－5他	近世	
041	木戸跡	南部字西町8491他		
042	陣ヶ森	大和字獅ヶ山2804他		
043	篠井山経塚	成島字大垈4654他		
044	四条氏屋敷	内船字寺廻3599他		
045	地頭屋敷	内船字矢都5359他		
046	東の遠見・西の遠見	十島字本久保1499他		
047	十島口留番所跡	十島字的場341他		
048	佐野氏屋敷	下佐野字東山940他		天子湖内
049	後原	塩沢字後原681他	縄文	
050	十島金山	十島字間瀬之内2007他		
051	原戸	大和字吉田1165他	縄文	
052	寺前	中野字寺前4137他	縄文・中世	消滅

南部町の遺跡地名一覧表（旧 富沢町）（山梨県遺跡台帳より）

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備　　考
01	神之木	楮根字神之木	縄文	
02	原戸北	楮根字幡谷戸	縄文	
03	原戸南	楮根字臺原	縄文	
04	真篠城跡	福士字真篠	中世	城郭
05	真篠	福士字真篠	縄文	
06	前田	福士字真篠	縄文	
07	仲間	福士字真篠	縄文・中世	
08	平旧堤防跡	福士字平	近世・近代	堤防
09	峯	福士字峯	縄文	
10	亀割	福士字矢島	縄文・弥生～古墳	
11	水代	福士字峯	旧石器・縄文	
12	天来山	福士字峯	旧石器・縄文・弥生・平安	
13	八幡平	福士字峯	旧石器・縄文	
14	峯経塚	福士字峯	中世？	塚
15	金毘羅山砦跡	福士字宮部	中世	城郭
16	市小路	福士字市小路山	縄文	
17	向田	福士字向田	中世・近世	
18	鯨野	福士字鯨野	中世・近世	
19	火打石	福士字火打石	中世・近世	
20	竹の沢	福士字竹之沢	中世・近世	
21	切久保畝状竪堀群	福士字切久保原・矢島川向	中世	城郭？
22	向島	福士字切久保原	縄文	
23	切久保	福士字切久保	旧石器・縄文	
24	増野	万沢字増野	縄文	
25	上平	万沢字上平	縄文	
26	西行	万沢字西行山	縄文	
27	天水	万沢字天水	縄文	
28	赤坂	万沢字赤坂	縄文	
29	横沢	万沢字横沢	縄文	
30	猪原	万沢字猪之原	縄文	
31	天神堂	万沢字天神堂	旧石器・縄文・古墳・平安	
32	柿の久保	万沢字柿の久保	縄文	
33	北原	万沢字北原ほか	縄文	
34	御屋敷	万沢字御屋敷	縄文・中世	
35	金毘羅神社	万沢字松山	旧石器・縄文	
36	中尾	万沢字中尾	縄文・平安	
37	古御所	万沢字古御所	縄文・中世	
38	平山	万沢字下平山	縄文	
39	栩久保	万沢字栩久保	縄文	
40	権現堂	万沢字権現堂	旧石器・縄文	
41	白鳥山砦跡	万沢字白鳥山	中世	城郭
42	下柳沢	万沢字境川	近世	
43	境川	万沢字境川	弥生・中世	
44	鳥居尾砦推定地	万沢字境川	中世？	城郭？
45	鳥居尾砦推定地	万沢字境川	中世？	城郭？
46	日向	万沢字日向	縄文	
47	杉山	万沢字杉山	縄文	
48	中沢	万沢字中沢	縄文	
49	大城	万沢字大城沢	縄文	
50	登尾	万沢字登尾	縄文	
51	篠井山経塚群	福士	平安～鎌倉・近世	経塚

第１表　遺跡地名一覧

第１図　中部横断自動車道路線図（平成18年４月）及び南部町内の遺跡分布図（1/50,000）



３桁数字は旧南部町の遺跡番号
２桁数字は旧富沢町の遺跡番号

第２図　寺前遺跡位置図（地形図1/25,000・工事図面（1/1,000）

第３章　調査の方法と基本層位

第１節　調査の方法

１．調査区の規模

発掘調査は、東西65m、南北25mほどを測る約1,600㎡が調査対象区域である。このうち、約1,200㎡を発掘調査した。

２．調査グリッドの設定

発掘調査の実施に際し、国土座標に基づく５mグリッドを設定した。基準杭については、北東隅の杭から南へアラビア数字で１・２・３・４の順に付し、その南北ラインから西のラインごとに５・６・７と順に付した。なお、グリッドの呼称については、４点の基準杭で囲われたグリッド南西の基準杭の名称を充てた。

３．表土層の除去

調査区域は、主にお茶畑として利用されていた土地であり、畑の耕作土である黒色の表土層（基本層位のⅠ層）及び樹根の影響が大きく遺構確認が困難であった暗茶褐色土層（基本層位のⅡ層）を重機で掘削、除去した。掘削深度は、およそ30～50cmであったが、調査区南西部分に建っていた住宅基礎の盛土部分や東南部に確認された谷状の落ち込み部分では1m程を除去している。

４．表土層除去後の調査

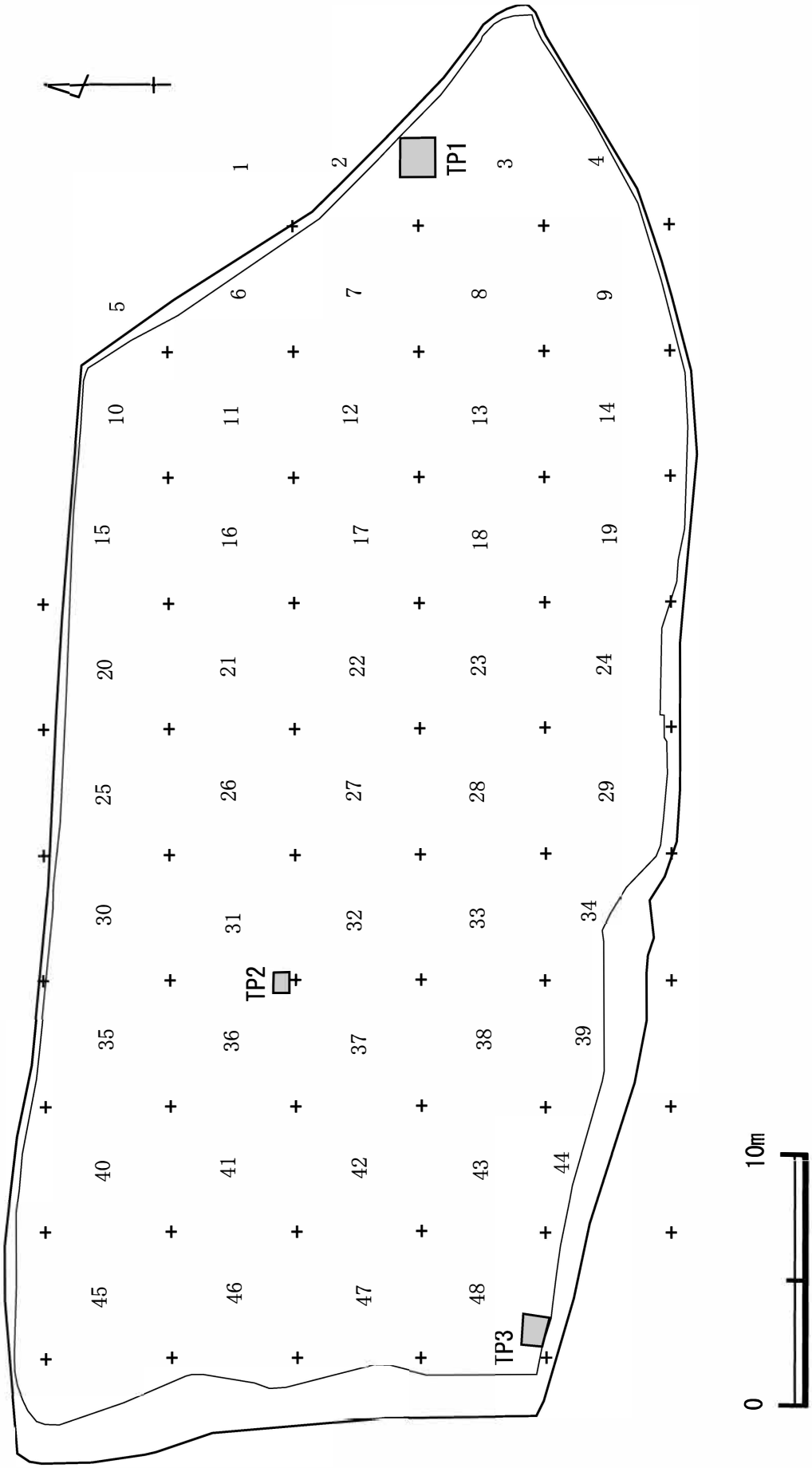
褐色土層（基本層位のⅢ層）以下の掘り下げは人力で行ない、遺構や遺物の検出に努めた。表土層の掘削後、調査区域内に大きな傾斜が確認されたため、グリッドにとらわれず地形や土層堆積を考慮し、適宜セクションベルトを設定して調査を進めた。また、各遺構については土層断面図、平面図、エレベーション図を作成し、遺跡全体図の作成では航空写真測量を実施した。出土遺物は、出土点数が少なかったことから、Ⅲ層以下の出土物は原則として全て位置を記録し図化した。

第２節　基本層位

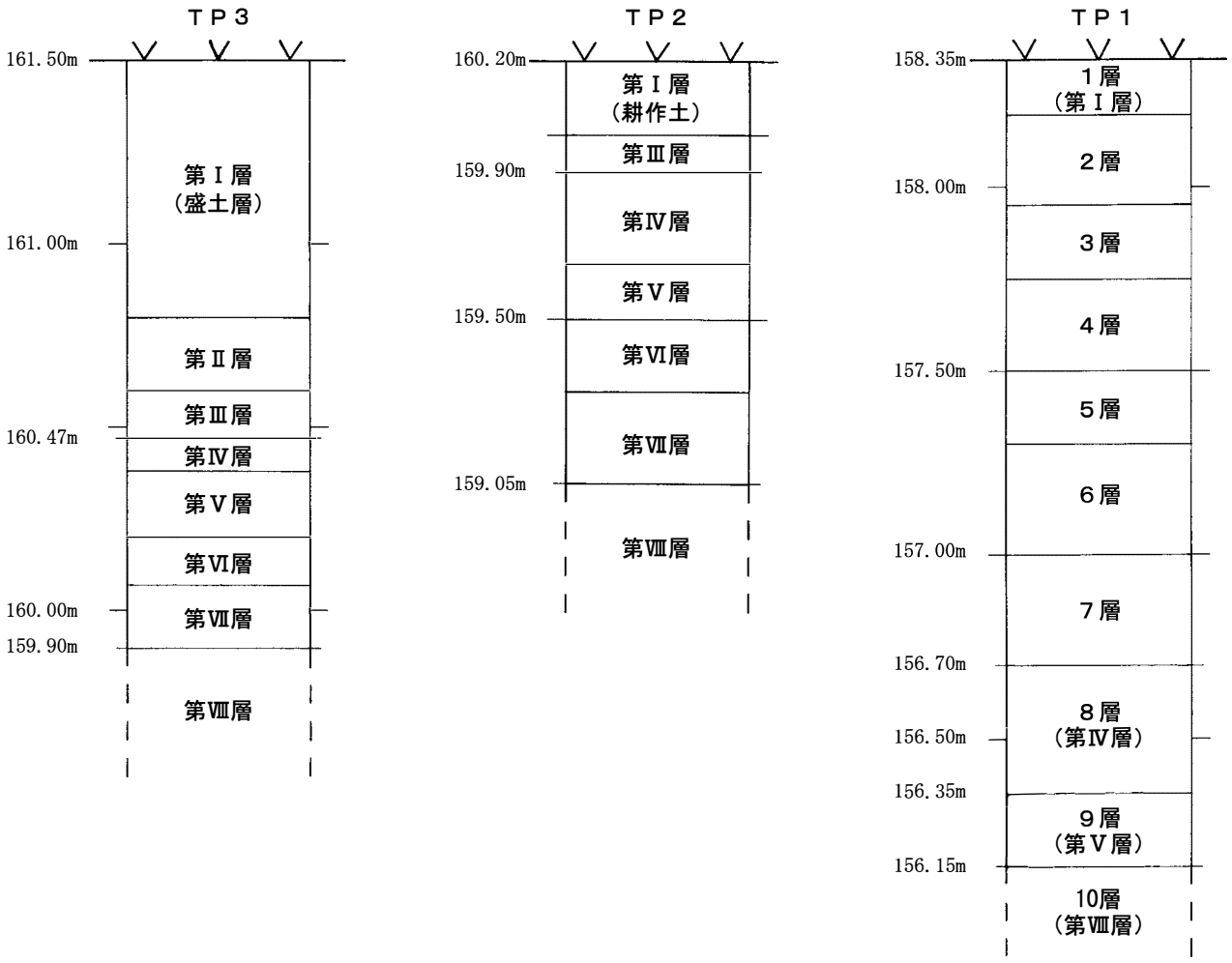
調査区域は、西端部分でほぼ平坦となるものの、全体に西から東（富士川の方角）への傾斜がある。また、調査区中央部から南東へかけては東西方向に谷状の落ち込みが確認された。こうした傾斜がみられる調査区内の基本土層は、３ヶ所に設定したテストピット（東から順にTP１、TP２、TP３）から作成した。TP１は谷部の一番低地部分に、TP２は試掘調査の深掘り部分で、調査区中央よりやや西よりの勾配が強くなりはじめる辺り、TP３はほぼ平坦な地点にあった攪乱部分（浄化槽跡）を利用して設定した。ただし、TP２は試掘によってⅢ層以上が消失していたため、このすぐ北側に位置しⅣ層の標高が変わらない溝状遺構２の北端セクションを参考にしてⅠ～Ⅲ層部分の土層図を作成した。

基本土層のⅠ層は、TP１とTP２においては黒色の耕作土であるのに対して、宅地部に位置するTP３は宅地用の盛土がこれに該当する。TP２とTP３は、Ⅲ層以下の土層が同じであるが、TP１は谷部の落ち込み部分ということもあり堆積土が厚く、また土層の対応関係の把握が困難であったことからアラビア数字による表記とし、対応するものについてはカッコ内に示した。ただし、土層の色調等から２～５がⅡ層に、６～７層がⅢ層に概ね比定される。各ピットで共通する堆積土は、白色で安山岩質の礫が含まれる自然堆積層のⅣ層である。礫は、TP２とTP３では１～10mmと小石程度であったが、調査区中央部より東側では５～10cmほどの大きさであった。ただし、この礫は調査区全体のⅣ層に含まれるものではなく、主に東側でみられた。また、同様の礫はⅧ層中にも顕著にみられた。

各ピットのⅣ層を比較すると、TP３とTP２で0.6m、TP３とTP１で3.8m近くの比高差がある。Ⅷ層でも、TP３とTP２で0.9m、TP３とTP１で3.8m近くの比高差があり、東へ大きく傾斜していることがわかる。


TP1
TP2
TP3
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
10m

第３図　グリッド設定図



第４図　基本土層図と土層注記（S＝1/20）

基本土層（ＴＰ２・ＴＰ３）

Ⅰ層	黒色土	耕作土／砂利や砂を含む住宅盛土
Ⅱ層	暗褐色土	粘性弱、しまりあり、1－3㎜赤色粒子あり、1㎜黄色粒子あり、1㎜黒色粒子あり 1㎜白色粒子少量、炭化物の混入あり
Ⅲ層	褐色土	粘性あり、しまりあり、1－2㎜赤色粒子少量、1㎜黄色粒子あり、1－2㎜白色粒子あり
Ⅳ層	暗茶褐色土 （遺構確認面）	地山層、粘性あり、しまり強い、1㎜赤色粒子多量、1㎜黄色粒子少量、1㎜黒色粒子少量 1－5㎜青灰色粒子やや多い、1－2㎜白色粒子多量、5-10㎜小石少量
Ⅴ層	暗黄褐色土	地山層、粘性やや強い、しまり強い、1㎜赤色粒子少量、1㎜黄色粒子少量、1㎜黒色粒子少量 1－5㎜青灰色粒子やや多い、1－2㎜白色粒子多量、5－10㎜小石少量
Ⅵ層	黄褐色土	地山層、粘性強い、しまり強い、1㎜赤色粒子少量、1㎜黄色粒子少量、1－5㎜青灰色粒子やや多い 1－2㎜白色粒子多量、5－10㎜小石少量
Ⅶ層	明黄褐色土	地山層、粘性強い、しまり有り、1－5㎜青灰色粒子多量、1－5㎜白色粒子多量、1cm小石多量
Ⅷ層	明黄褐色土	地山層、粘性あり、しまり有り、1－5㎜青灰色粒子多量、1－5㎜白色粒子多量、1－10cmの礫多い

谷部の土層（ＴＰ１：調査区東端壁部分）

1層	黒色土	Ⅰ層（耕作土）
2層	暗褐色土	粘性弱い、しまりやや弱い、1－2㎜赤色粒子多量、1－2㎜黄色粒子多量、1－2㎜黒色粒子多量 1－2㎜白色粒子多量、１cm大の礫あり、根の影響強い
3層	暗褐色土	粘性やや弱い、しまり有り、1－3㎜赤色粒子多量、1－3㎜黒色粒子多量、1－3㎜白色粒子多量
4層	褐色土	粘性弱い、しまり弱い、1－2㎜赤色粒子少量、1－2㎜白色粒子少量、1－3㎜黒色粒子あり 1cm大の炭化材多い
5層	暗褐色土	粘性弱い、しまり弱い、1－2㎜赤色粒子少量、1－2㎜白色粒子少量、1－3㎜黒色粒子あり 1cm大の炭化材多い
6層	褐色土	粘性あり、しまり有り、1－2㎜赤色粒子微量、1－5㎜白色粒子あり、1－3㎜黒色粒子あり 1cm大の炭化材多い、1cm大の小石少量
7層	褐色土	粘性あり、しまり有り、1－2㎜赤色粒子少、1－2㎜黒色粒子少、1－2㎜白色粒子あり 炭化材含む、１cm大の礫あり
8層	暗茶褐色土	Ⅳ層（地山層）
9層	暗黄褐色土	Ⅴ層（地山層）
10層	明黄褐色土	Ⅷ層（地山層）

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　土坑について

調査した土坑は、総計12基で、調査区の東半分に土坑の広がりが認められる。

１号土坑（遺構：第５図）

（遺構）本遺跡のほぼ中央に位置する。径138cmで、深さは26cmを計測する。形状は、円形を呈する。坑底には小さな穴が認められるが、お茶畑であったことによる根の攪乱と思われる。

（遺物）出土遺物なし

２号土坑（遺構：第５図、遺物：第９図-１）

（遺構）１号土坑の北東に位置する。長辺300cm、短辺115cmで、深さは7.8cmを計測する。形状は、長方形を呈し、南北方向に長辺を有する。坑底は、凹凸である。

（遺物）覆土中より陶器片（常滑）が１点出土している。大甕の肩部で、灰釉（自然釉）が全体に付着している。外面には、ヘラによる調整痕がみられる。

３号土坑（遺構：第５図）

（遺構）２号土坑の南東に位置する。長径157cm、短径142cmで、深さは50.3cmを計測する。形状は、ほぼ円形を呈する。１号土坑と同様に坑底には小さな穴が認められるが、根による攪乱と思われる。

（遺物）土坑覆土中より２点の縄文土器が出土した。２点とも摩耗が激しい小破片で、時期は不明である。

４号土坑（遺構：第５図）

（遺構）３号土坑の東に位置し、５号土坑と６号土坑に挟まれる。長径126cm、短径93cmで、深さは33.4cmを計測する。形状は、楕円形を呈し、ほぼ東西方向に長径を有する。

（遺物）出土遺物なし

５号土坑（遺構：第６図）

（遺構）４号土坑の北に位置する。長径140cm、短径136cmで、深さは44.4cmを計測する。形状は、ほぼ円形を呈する。土坑の半分上は、掘りすぎのためにできた段差である。

（遺物）出土遺物なし

６号土坑（遺構：第６図）

（遺構）４号土坑の南に位置する。長径118cm、短径96cmで、深さは19.5cmを計測する。形状は、ほぼ円形を呈する。本土坑も坑底には小さな穴が認められるが、根による攪乱と思われる。

（遺物）出土遺物なし

７号土坑（遺構：第６図）

（遺構）３号土坑と１号土坑に挟まれる。長径208cm、短径146cmで、深さは105.7cmを計測する。形状は、楕円形を呈し、北東から南西方向に長径を有する。本遺跡の中では一番深い土坑である。

（遺物）出土遺物なし

8号土坑（遺構：第6図）

（遺構）10号土坑の南に位置する。本土坑は重複関係にあり、新しい土坑の方が規模は大きく、残存している箇所で長径134cm、短径110cm、深さは10cmを計測する。形状は、隅丸方形を呈する。古い土坑の規模は、残存している箇所で長径79cm、短径 67cm、深さは20cmを計測する。形状は、円形を呈する。

（遺物）出土遺物なし

9号土坑（遺構：第7図）

（遺構）10号土坑の西に位置する。試掘調査の段階で確認された土坑であるが、調査の結果、本土坑と風倒木痕の重複が認められた。しかし、新旧関係については明らかではない。第5図の平面図から、遺構の北端に一段深くなった箇所が土坑である。形状は長方形を呈し、深さは63.5cmを計測する。風倒木痕は、長径320cm、短径190cmである。形状は、不整円形を呈する。

（遺物）出土遺物なし

10号土坑（遺構：第7図、遺物：第9図-2）

（遺構）9号土坑の東に位置する。長径224cm、短径155cmで、深さは96cmを計測する。形状は、楕円形を呈し、ほぼ東西方向に長径を有する。

（遺物）2は、試掘調査時に覆土中（試掘14トレンチ第2号竪穴跡）よりみつかっている。摩耗が激しいが、深鉢胴部の破片である。把手部分が一部残っており、磨消縄文が施文されている。縄文時代後期初頭に比定される。

11号土坑（遺物：第9図-3～6）

（遺構）本遺跡の最東端に位置する。本土坑は、9号土坑と同様に風倒木痕である。

（遺物）埋土中からは、土器片3点、石器2点が出土している。3は、縄文時代中期末に比定される深鉢胴部片で、隆帯で区画された右部分には縄文が施文されている。4は、縄文時代中期末から後期初頭に比定される深鉢で、胴部屈曲部の直下部分にあたる。もう1点の縄文土器は、同じく縄文時代中期末から後期初頭に比定される無文の深鉢胴部片である。

5の打製石斧は原礫面の残る剥片石器で、基部破損部に剥離調整がされている。6は両端部を両極打法により整形された削器で、先端部から剥離状に破損がみられる。南部町内では、万沢の天神堂遺跡や旧富沢町内で類似した石器の出土事例が報告されている。（参考文献1・2）

12号土坑（遺構：第7図）

（遺構）11号土坑の北西に位置し、浅い谷状の斜面に構築される。斜面に拡がる礫層中で、礫がなかった範囲を遺構と判断して調査した。長径147cm、短径131cm、深さは23.3cmを計測する。形状は、ほぼ円形を呈する。

（遺物）出土遺物なし

第2節　焼土遺構について

焼土遺構は、調査区の北東隅に確認した1基のみである。

焼土遺構（遺構：第8図）

（遺構）本遺構は、10号土坑の東に位置する。重機による表土掘削の際に、確認された遺構である。形状は不整形を呈し、長径90cm、短径83cm、深さは12cmを計測する。浅い掘り込みの周辺には、小さな焼土が

散布する。本体である焼土遺構は、炉跡のような浅い掘り込みが認められるものの、縄文時代の地床炉とは異なったものと思われ、形状については不整形な方形状を呈する。また、この浅い掘り込みを中心として、掘り込みより外に広く焼かれていた痕跡や、周囲に散乱した小さな焼土も認められる。散乱した焼土は、東西方向で3.5m、南北方向で2.5mの範囲に存在する。このような状況から、確認された面が焼土を形成した生活面であったものと判断される。

遺物が伴っていないことから時期は不明であるが、２号土坑から中世の陶器が出土していることから、この時期以降のものではないかと考えられる。

（遺物）出土遺物なし

第３節　溝について

調査した溝は、総計２条である。溝は、調査区の中央よりやや西に存在し、ほぼ南北に延びる。１号および２号溝の構築時期については、覆土や規模などから同じ頃に造られたものと思われる。

１号溝（遺構：第８図）

（遺構）非常に浅いため途中で消滅する。確認された溝の長さは6.30m、幅59～63cm、深さは３～４cmを計測する。確認面は、現在の表土上面から約50cmと浅かったことから、攪乱をかなり受けたものと思われる。また、この溝については、お茶畑に付属する施設ではない（お茶の耕作者の方から教えを受けた）ことが明らかにされており、中世から近代にかけて構築されたものと思われる。覆土は、粘性やしまりのある暗褐色土である。

（遺物）出土遺物なし

２号溝（遺構：第８図）

（遺構）１号溝の東隣に位置する。確認された溝の長さは17.5m、幅65～70cm、深さは６～10cmを計測する。かなり長い溝であるが、南側では擁壁が構築されていたために破壊されている。覆土は、１号溝と同様である。

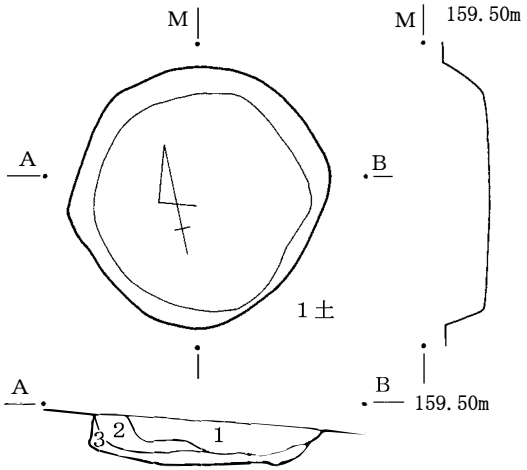
（遺物）出土遺物なし

第４節　遺構外出土遺物について（遺物：第９図-７～16）

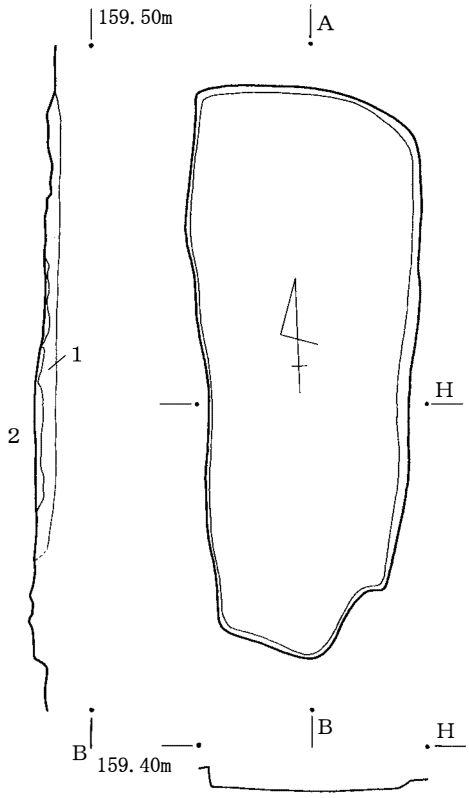
７～14は、谷部の堆積土中より出土したものである。７～９は、いずれも縄文時代中期末から後期初頭に比定される縄文土器で、深鉢頚部片の7は屈曲部の沈線より下方に縄文が施文されている。８は、やや斜めに沈線があり、破片の上部にわずかな屈曲がみられる。９は、摩耗によりうっすらとではあるが縦方向の沈線が１条確認できる。10は、縄文時代後期初頭に比定される焼成の良い薄手の深鉢胴部片である。横位に４条沈線がある。11は須恵器の甕で、外面には一部自然釉の付着がみられる。

12～14は縄文時代の石器である。12は剥片素材を利用した削器で、両方の長辺に調整剥離痕がみられる。13はその形状から、刃部と基部が折れた打製石斧の未製品である。基部の折れ部には二次加工痕がみられることから、転用した可能性も考えられる。14は、二次加工痕を有する剥片である。

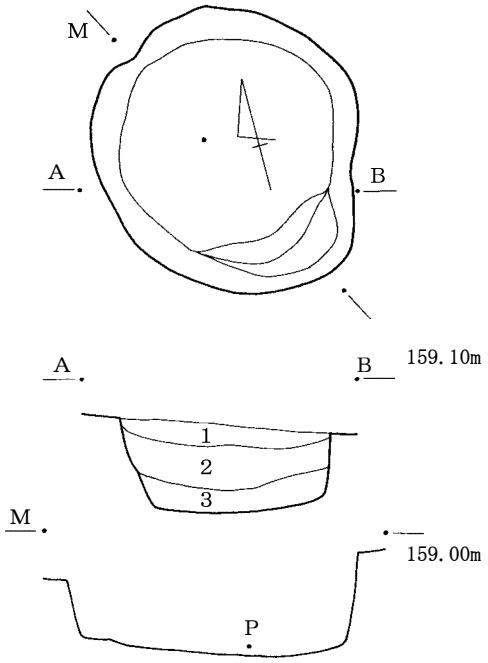
15は、調査区内の緩斜面で出土した縄文土器である。中期末から後期初頭の深鉢形土器片で、縦位の沈線が２条施文されている。表土一括遺物の16は、二次加工痕を有する剥片である。形状から、打製石斧を制作中に刃部側から折れたと考えられる。折れ面には、細かい剥離痕がみられる。



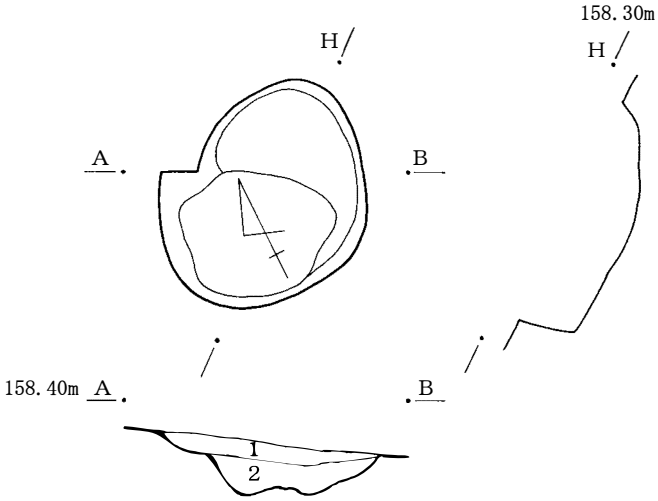
1号土坑
1層　暗茶褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-10ミリの白色粒子多量、
　　赤色粒子少量、細かな根痕あり
2層　暗褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-5ミリの白色粒子あり、1-5ミリの赤色粒子あり
3層　暗褐色土　粘性あり、しまりあり、1-5ミリの赤色粒子少量、1-5ミリの白色粒子少量



2号土坑
1層　暗褐色土　粘性あり、しまりあり、1-5ミリの白色粒子多量、
　　1-3ミリの赤色粒子あり、細かな根痕あり
2層　暗茶褐色土　粘性あり（1層より強い）、しまり有り、
　　1-5ミリの白色粒子あり、1-3ミリの赤色粒子少量

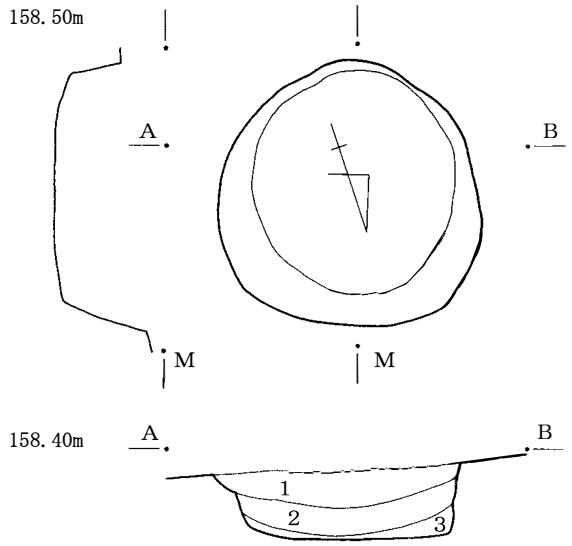


3号土坑
1層　暗茶褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-3ミリの白色粒子、
　　1ミリの赤色粒子少量
2層　暗茶褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-5ミリの白色粒子多量、
　　1-5ミリの赤色粒子あり
3層　暗褐色土　粘性あり、しまりあり、1-3ミリの白色粒子少量、
　　1-2センチの礫少量

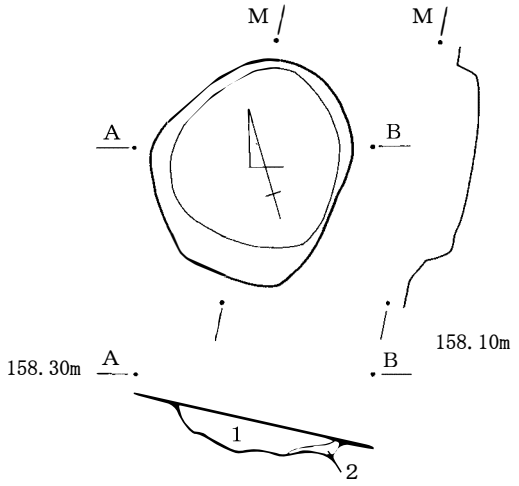


4号土坑
1層　暗褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-2ミリの白色粒子多量、
　　1-3ミリの赤色粒子あり、炭火物少量
2層　暗茶褐色土　粘性あり、しまりあり、1-2ミリの白色粒子多量、
　　1ミリの赤色粒子少量

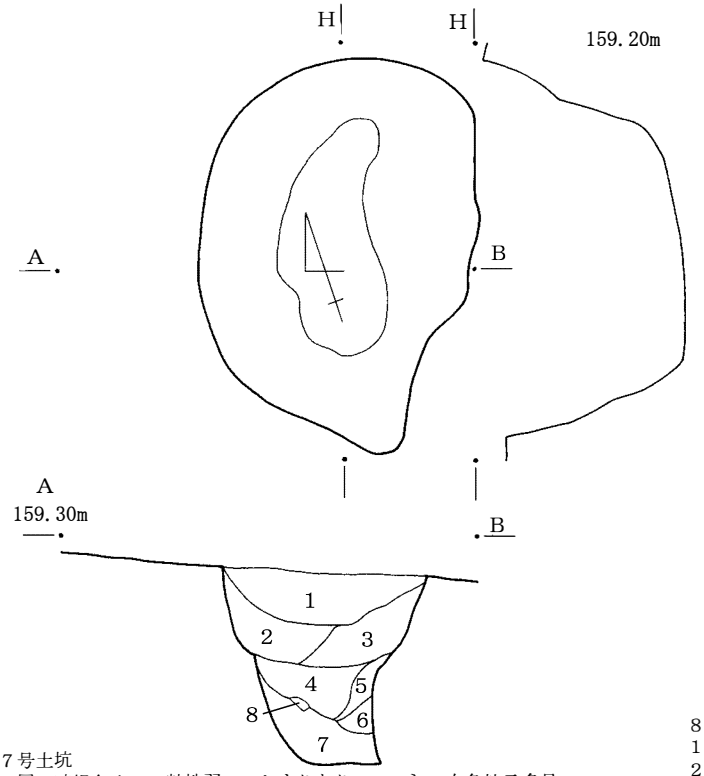
第５図　検出遺構（１～４号土坑）



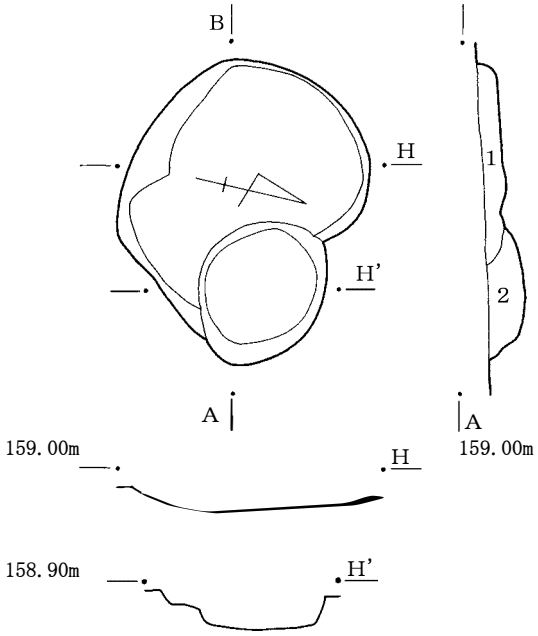
5号土坑
1層　暗褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-2ミリの白色粒子あり、
5-10ミリの薄茶褐色ロームブロックあり
2層　褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-2ミリの白色粒子あり、
5-10ミリの薄茶褐色ロームブロック多量、1-2ミリの赤色粒子あり
3層　褐色土　粘性あり、しまりあり、1-2ミリの白色粒子少量、
5-10ミリの薄茶褐色ロームブロック少量



6号土坑
1層　暗褐色土　粘性あり、しまりあり、1-2ミリの白色粒子少量、
1-2ミリの赤色粒子少量、炭化物含む
2層　茶褐色土　粘性あり、しまりあり、1-2ミリの白色粒子あり

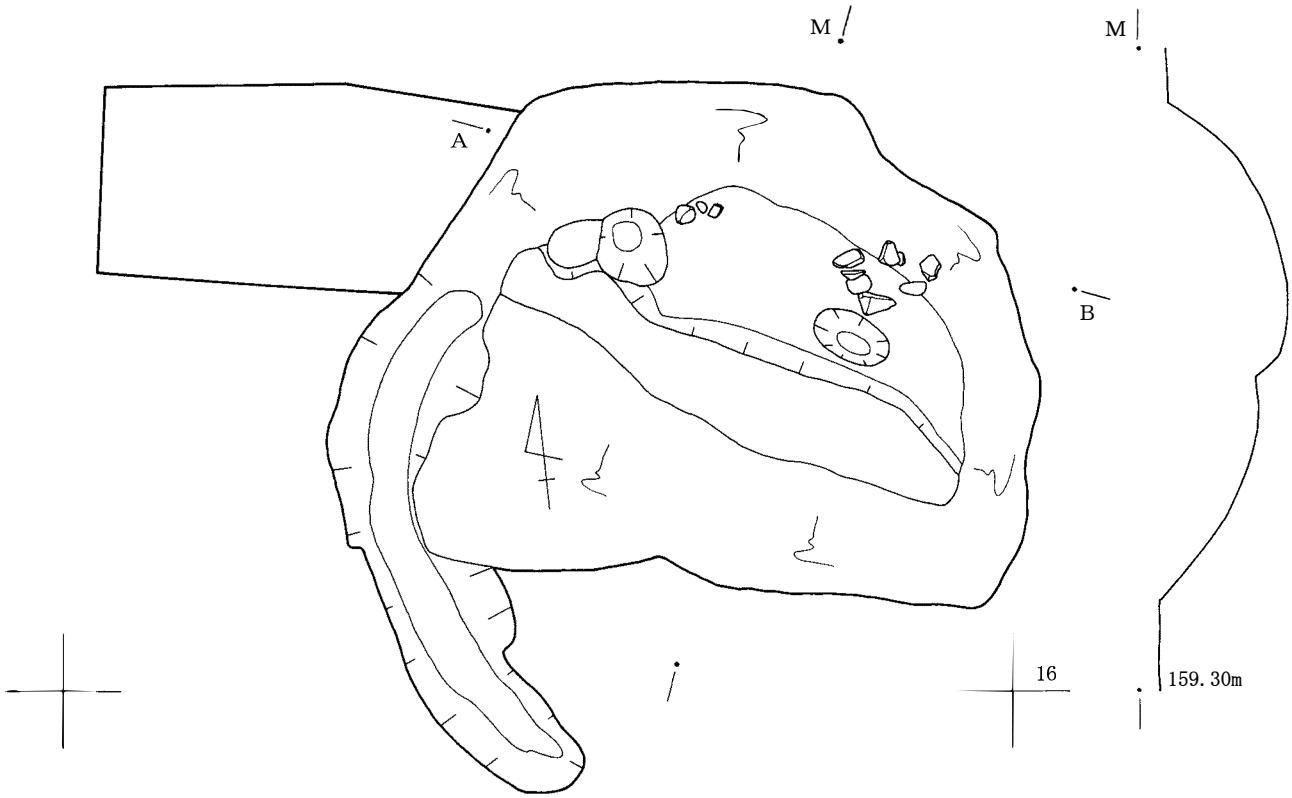


7号土坑
1層　暗褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-10ミリの白色粒子多量、
1ミリの薄茶褐色粒子多量
2層　暗黒褐色土　粘性弱い、しまりあり、1-2ミリの白色粒子あり、
薄茶褐色ロームブロックあり、
3層　褐色土　粘性あり、しまりあり、1-2ミリの白色粒子あり
4層　黒褐色土　粘性あり、しまりあり、5ミリの白色粒子少量
5層　暗茶褐色土　粘性あり、しまりあり、1ミリの白色粒子少量
6層　褐色土　粘性強い、しまり弱い、1センチの白色の礫あり
7層　褐色土　粘性強い、しまりあり、1-3ミリの白色粒子少量

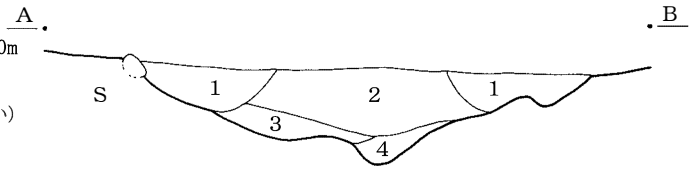


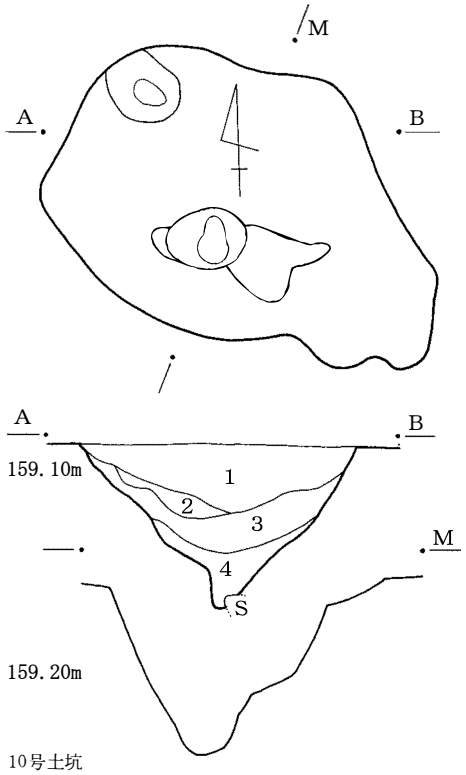
8号土坑
1層　褐色土　粘性あり、しまりあり、1ミリの白色粒子多量
2層　褐色土　粘性あり、しまりあり、1ミリの白色粒子少量、
5-10ミリの薄茶褐色ロームブロックあり

第6図　検出遺構（5~8号土坑）

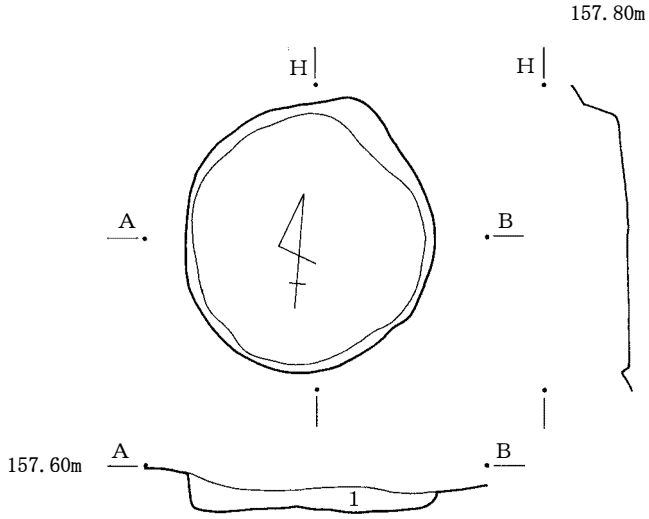


9号土坑
1層　黒褐色土　　しまり強い、白色の小石あり、風倒木痕
2層　暗褐色土　　しまり強い、1㎜の赤色粒子多量、
　　白色の小石多量、大型礫あり
3層　暗褐色土　　1㎝の白色の小石あり（2層より明るく茶色が強い）
4層　明褐色土　　地山の褐色粒子含む



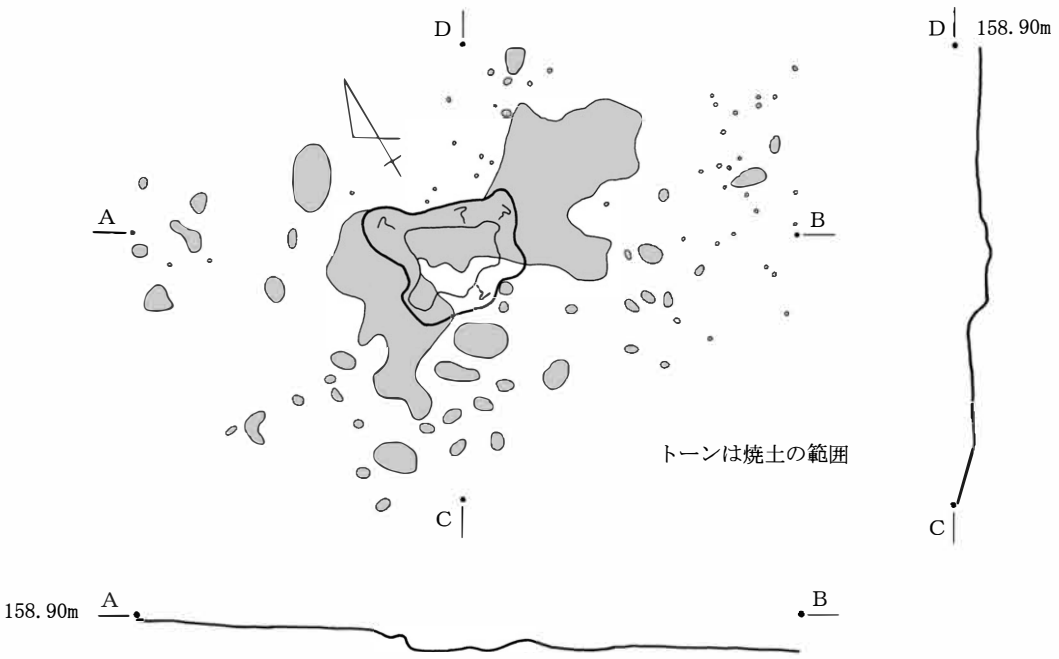


10号土坑
1層　暗褐色土　　粘性弱い、しまりあり、1-5㎜の白色粒子多量、
　　1-2㎜の赤色粒子あり、1-2㎝の白色の礫あり、炭化物あり
2層　褐色土　　粘性あり、しまりあり、1-5㎜の白色粒子あり、1-2㎜の赤色粒子あり
3層　赤茶褐色土　粘性強い、しまりあり、1-3㎜の白色粒子あり、炭化物少量あり
4層　暗褐色土　　粘性強い、しまり弱い、1-3㎜の白色粒子少量、炭化物少量あり

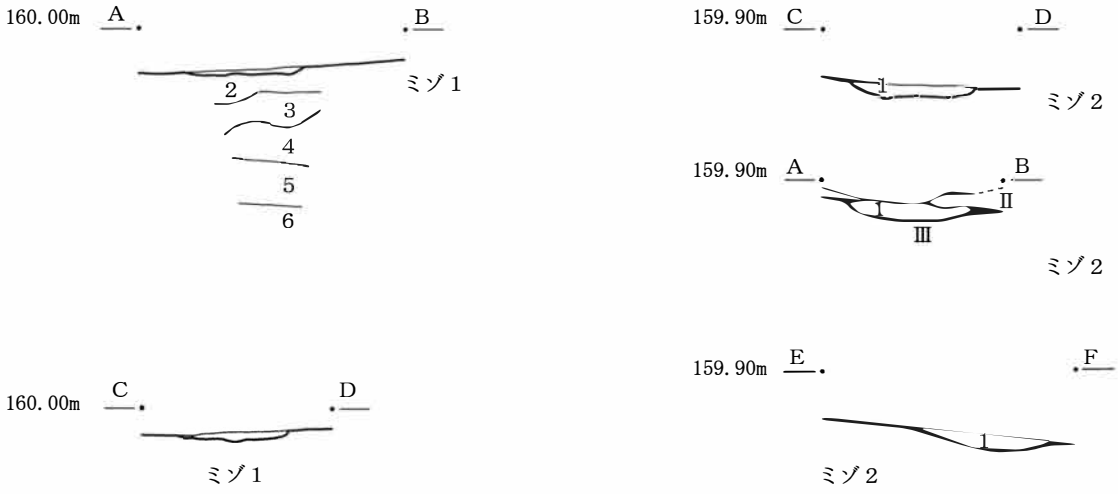


12号土坑
1層　暗褐色土　　白色粒子少量、赤色粒子少量、炭化物少量

第７図　検出遺構（９・10・12号土坑）



焼土遺構



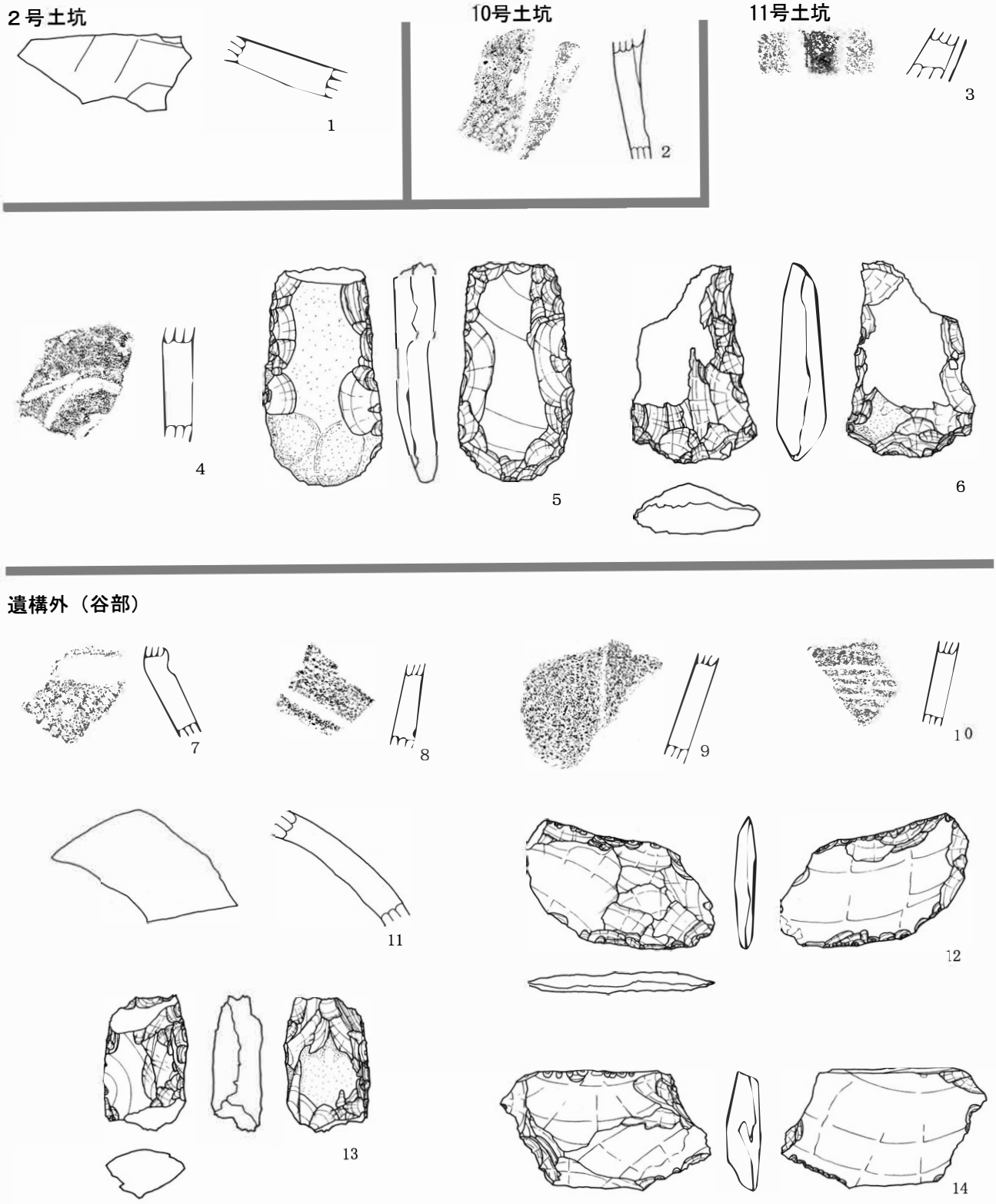
1号溝

1号溝（セクション1・セクション2）
1層　暗褐色土　　粘性あり、しまりあり、1-2㎜の白色粒子あり

2号溝

2号溝（セクション1～3）
1層　黒褐色土　　粘性あり、しまりあり、1-2㎜の白色粒子多量、
1㎜の赤色粒子あり、1㎜の薄茶褐色粒子多量

第8図　検出遺構（焼土遺構・1～2号溝）


2号土坑
10号土坑
11号土坑
1
2
3
4
5
6
遺構外（谷部）
7
8
9
10
11
12
13
14
遺構外
15
一括
16
石器類
(1:3)
10cm
土器類
(1:2)
5cm

第９図　出土遺物

第５章　まとめ

第１節　調査成果について

検出遺構について

みつかった遺構は、土坑12基、焼土遺構１基、溝２条であった。12基の土坑の内、２基は風倒木跡である。長方形を呈する２号土坑は、遺構覆土中に中世の陶器片（常滑の大甕）があったことから、中世に建立された慈眼寺と何らかの関わりがある遺構である可能性も考えられる。当該時期の遺構と思われる。残り９基の内、３号土坑・10号土坑・11号土坑からは覆土中から縄文土器が出土していることから、縄文時代中期末～後期初頭に位置づけられる遺構と考えられる。また、残りの６基の土坑についても、遺物の出土はなかったものの、検出された土層から縄文時代の遺構と考えられる。

出土遺物について

出土遺物は、縄文土器34点・縄文時代の石器6点・須恵器１点・陶器１点の合計42点で、調査面積に比べ非常に少ない量である（表４・表５参照）。出土遺物の内、縄文土器の多くは、直径１～２cm程の小破片で外面の摩耗が激しく文様の判別すら困難なものであった。しかし、文様が残された遺物やその他遺物の胎土や焼成などから、これらの遺物は縄文時代中期末～後期初頭に比定されるものである。

同じく縄文時代の遺物では、石器が出土している。この内６の削器は、南部町万沢の天神堂遺跡や旧富沢町内の遺跡で類似した石器が出土している。黄色風化泥岩を加工したこの石器は、天神堂遺跡では「撥型掻器」、上代遺跡や峰遺跡では「ヘラ状石器」として報告されている。これらの石器は、黄色風化泥岩の他、天神堂遺跡では黄色風化頁岩など特定の石材を利用している。他県の事例では、静岡県や神奈川県海岸部の遺跡で特徴的にみられる「段間型篦状石器」があるが、その多くは南部町でみつかっている石器とは多くの異なる特徴をもっていることが指摘されている（保坂　2006）。なお、「ヘラ状石器」は、主に東北以北に出土すると考えられている石器群であり、こうした背景もあり本報告書では削器として報告している。

調査区内の地形と遺構・遺物の分布状況

寺前遺跡の西には小高い山があり、その東裾に慈眼寺がある。慈眼寺から東へ向かって緩やかに傾斜し、富士川によって形成された河岸段丘が数段平坦部をもちながら富士川へと下っていく。発掘調査前の地形からは確認することができなかったが、本遺跡内には小規模な埋没谷が北東から南西方向に入っていることを確認した。谷部最深部と調査区西端部の比高差は約４ｍにもなる。

同調査区内の遺構分布をみると、調査区東側に偏在しているものの谷部以外の緩斜面部分にも検出されている。また、遺構の全ては谷の北側にみつかっている。一方、出土遺物は埋没谷から今回の調査でみつかった遺物42点の内の40点が出土している。縄文土器については、摩耗が激しく谷流入土中からの出土であり、縄文土器を含む谷部出土遺物の分布は、谷の南側斜面に集中している。このように遺構と遺物の分布状況に違いがみられるが、試掘調査の結果や調査区南西方向に隣接する台地などの地形を考えると、隣接する台地部分には小規模な集落の存在が想定される。

本遺跡調査区内では、谷部を中心として調査区東側に握り拳大から人頭大ほどの礫の分布がみられた。白色で多孔質なこの石材は、全体に丸みを帯びて加工の跡がみられない。また、出土層が基本土層の、層（地山層）であることから、自然に堆積したものであると考えられる。しかし、同じ層中でも西側ではみつからず、また周辺の試掘調査でも確認されていないことから、これらの礫が堆積した経過には何かしらの自然的要素が介在していたことが推測される。なお、中部横断自動車道建設に関わる地質調査担当者からは、堆積した経過については不明であるとの回答を得た。

参考文献：（財）山梨文化財研究所（編）2004..11『天神堂遺跡－農道上代線建設に伴う発掘調査報告書－』山梨県峡南地域振興局農務部・南部町教育委員会 ／ 保坂康夫　2006.6.11「『チャンチャン石』の３万年」『山梨考古』第76号　6 - 7 頁　山梨県考古学協会

第２節　データ一覧（遺構・遺物）

第２表　土坑と焼土遺構の一覧

遺構名	図版番号	位置 グリッド	平面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
１号土坑	第５図	28	円　形	138.0	138.0	26.0	－	
２号土坑	第５図	26.27	長方形	300.0	115.0	7.8	中世	第９図－１
３号土坑	第５図	23	円　形	157.0	142.0	50.3	縄文中末～後初	縄文土器２点が出土
４号土坑	第５図	13.18	楕円形	126.0	93.0	33.4	－	
５号土坑	第６図	12.13. 17.18	円　形	140.0	136.0	44.4	－	
６号土坑	第６図	18.19	円　形	118.0	96.0	19.5	－	
７号土坑	第６図	23.28	楕円形	208.0	146.0	105.7	－	
８号土坑小	第６図	16	円　形	79.0	67.0	20.0	－	残存部で計測
８号土坑大	第６図	16	隅丸方形	134.0	110.0	10.0	－	残存部で計測
９号土坑	第７図	20	不整形	320.0	190.0	63.5	－	風倒木痕
10号土坑	第７図	15	楕円形	224.0	155.0	96.0	縄文後初	第９図－２が出土
11号土坑	第６図	3	不整形	－	－	－	縄文中末～後初	第９図－３～６、他に縄文土器２点 風倒木痕
12号土坑	第７図	7	円　形	147.0	131.0	23.3	－	
焼土遺構	第８図	10	不整形	90.0	83.0	12.0	中世～	

第３表　溝状遺構の一覧

遺構名	図版番号	位置 グリッド	平面形状	長軸 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
１号溝	第８図	31.32. 36.37	－	6.3	59～63	3～4	中世～近世	
２号溝	第８図	30-33	－	17.5	65～70	6～10	中世～近世	

試掘調査及び本調査での遺構名対応関係は以下の通りである

試掘調査　→　本調査

第１号溝状遺構　→　２号溝
第２号溝状遺構　→　１号溝
第２号竪坑　→　10号土坑
第１号土坑　→　8号土坑

第４表　土器・陶磁器の一覧

図版番号	出土地点		種別	器種	部位	時代・時期	整形技法（文様）	色調	胎土	注記	備考
	グリッド	遺構									
第９図-１	27	２号土坑	陶器	大甕	肩部	中世	輪積み、 ヘラ調整（外面）	灰オリーブ（外） 暗赤灰（内）	灰黄	寺前２土P-１H20.11.04	常滑、自然釉付着
－	23	３号土坑	土器	－	－	縄文時代	隆帯、沈線	明赤褐色	石	寺前３土H20.10.30	摩耗激しい
－	23	３号土坑	土器	－	－	縄文時代	－	にぶい橙色	長	寺前３土H20.11.５	摩耗激しい
第９図-２	15	10号土坑	土器	深鉢	胴把手	縄文後期初頭	磨消縄文、把手	明褐色	石、長、角	寺前試14トレ２竪H20.６.９	摩耗激しい、試掘資料（覆土出土）
第９図-３	3	11号土坑	土器	深鉢	胴部	縄文中期末	磨消縄文、隆帯	明赤褐色	石	寺前No.35H20.11.14	摩耗激しい
第９図-４	3	11号土坑	土器	深鉢	胴部	縄文中末～後初	沈線文様	明赤褐色	長・石	寺前No.33H20.11.14	
－	3	11号土坑	土器	深鉢	胴部	縄文中末～後初	無文	明赤褐色	石	寺前No.34H20.11.14	
第９図-７	9	－	土器	深鉢	頸部	縄文中末～後初	沈線１条（横） 単節縄文	にぶい黄褐色	長、石	寺前No.５H20.10.28	摩耗激しい
第９図-８	9	－	土器	深鉢	頸部	縄文中末～後初	沈線１条（斜）	褐色	石	寺前No.13H20.10.28	摩耗激しい
第９図-９	9	－	土器	深鉢	胴部	縄文中末～後初	沈線１条（縦）	明黄褐色	石	寺前No.11H20.10.28	器面が摩耗
第９図-10	19	－	土器	深鉢	胴部	縄文後期初頭	沈線４条（横）	赤褐色	石、角	寺前No.25H20.11.12	焼成良く、薄手の土器
第９図-11	2	－	須恵器	甕	肩部	中世	ロクロ	黒（外）/灰（内）	灰黄	寺前No.31H20.11.12	内面にナデ痕、自然釉付着
－	3	－	土器	深鉢	胴部	縄文時代	－	明赤褐色	石	寺前No.１H20.10.28	摩耗激しく表面剥落
－	3	－	土器	深鉢	胴部	縄文時代	－	明褐色	石	寺前No.２H20.10.28	摩耗激しい
－	4	－	土器	深鉢	胴部	縄文時代	－	褐色	長、雲	寺前No.３H20.10.28	摩耗激しく表面剥落
－	7	－	土器	－	口縁？	縄文時代	－	明赤褐色	石、角、雲	寺前No.19H20.10.28	摩耗激しい
－	7	－	土器	－	－	縄文時代	－	黄褐色	石、角	寺前No.21H20.10.28	摩耗激しい
－	8	－	土器	－	－	縄文時代	－	明赤褐色	石	寺前No.36H20.11.14	摩耗激しい
－	9	－	土器	深鉢	胴部	縄文中期～後期	無文	明赤褐色	石、長	寺前No.14H20.10.28	
－	9	－	土器	－	－	縄文時代	－	明赤褐色	石、長	寺前No.15H20.10.28	摩耗激しい
－	9	－	土器	－	－	縄文時代	－	褐色	石	寺前No.16H20.10.28	摩耗激しい
－	9	－	土器	－	－	縄文時代	－	明褐色	石	寺前No.17H20.10.28	摩耗激しい
－	9	－	土器	－	－	縄文時代	－	明黄褐色	石	寺前No.18H20.10.28	摩耗激しい
－	9	－	土器	深鉢	胴部	縄文時代	－	明赤褐色	石、長	寺前No.６H20.10.28	摩耗激しい
－	9	－	土器	深鉢	胴部	縄文時代	－	赤褐色	石	寺前No.７H20.10.28	摩耗激しい
－	9	－	土器	深鉢	胴部	縄文時代	－	にぶい橙色	石	寺前No.８H20.10.28	摩耗激しい、表面一部変色
－	9	－	土器	－	－	縄文時代	－	明赤褐色	石	寺前No.９H20.10.28	摩耗激しい
－	9	－	土器	－	－	縄文時代	－	明赤褐色	石	寺前No.10H20.10.28	摩耗激しい
－	19	－	土器	－	－	縄文時代	－	明赤褐色	長、雲	寺前No.20H20.10.28	摩耗激しい
－	19	－	土器	－	－	縄文時代	－	明赤褐色	石、長、角	寺前No.26H20.11.12	摩耗激しい
－	23	－	土器	－	－	縄文時代	－	明赤褐色	石	寺前No.24H20.11.12	摩耗激しい
－	24	－	土器	－	－	縄文時代	－	褐色	石、角	寺前No.23H20.11.12	摩耗激しい
－	31	－	磁器	碗	胴部	近代	コバルト、印判（銅板）	白色	白色	寺前試13トレ1号溝H20.6.9	試掘資料（２号溝付近の耕作土中）
第９図-15	38	－	土器	深鉢	胴部	縄文中末～後初	沈線２条（縦）	明赤褐色	雲	寺前No.22H20.11.06	調査区緩斜面部分より出土
－	一括	－	土器	－	－	縄文時代	－	明赤褐色	石、長	寺前表土一括	摩耗激しい
－	一括	－	土器	－	－	縄文時代	－	褐色	石、長、雲	寺前表土一括H20.11.20	摩耗激しい

上記表の凡例

時期：中末は「中期末」、後初は「後期初頭」

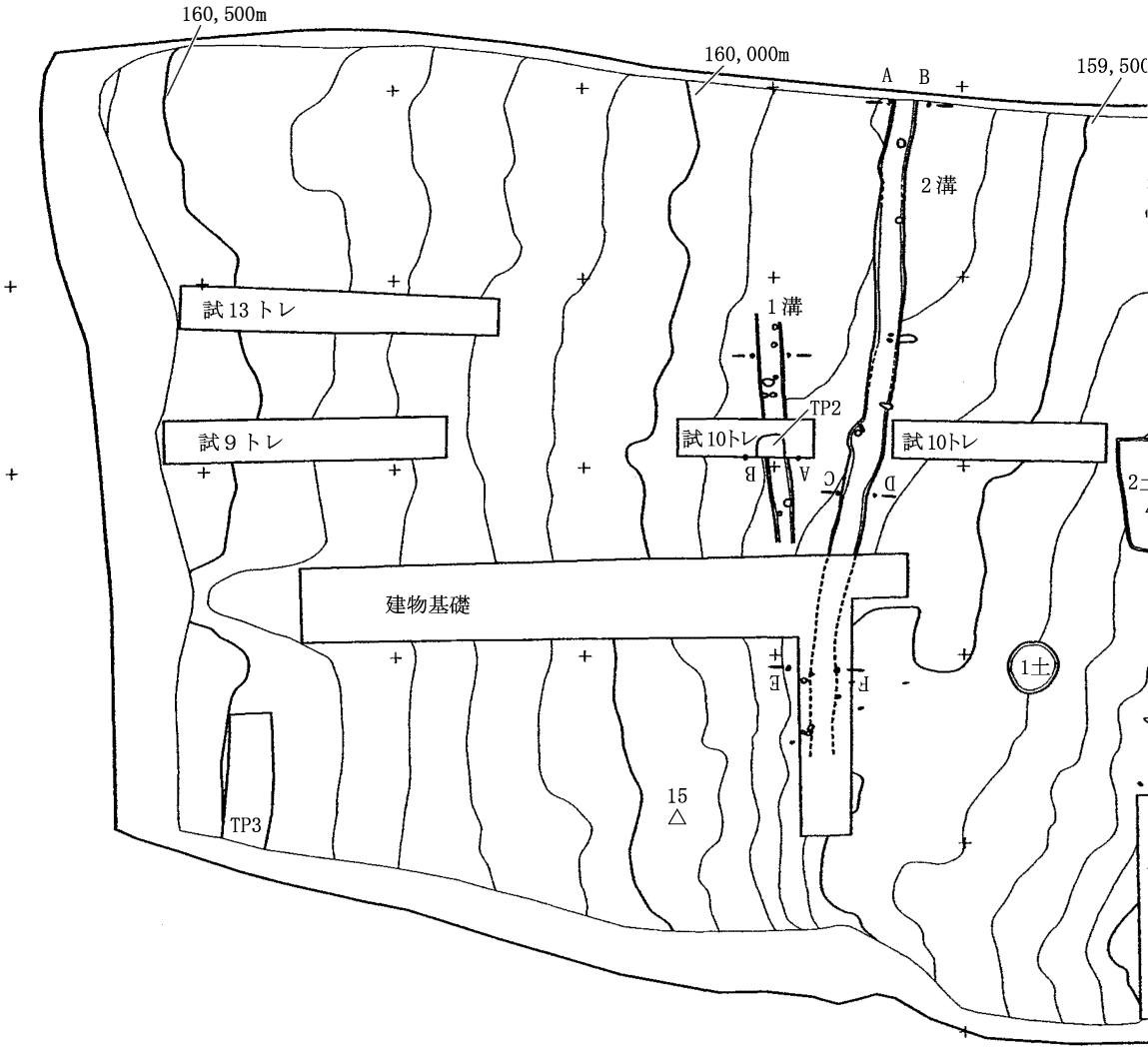
胎土：石＝石英、長＝長石、角＝角閃石、雲＝金雲母

第５表　石器の一覧

図版番号	出土地点		器種	素材	石材	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	注記	備考
	グリッド	遺構										
第９図-５	3	11号土坑	打製石斧	剥片石器	砂岩	灰色	113.5	62.0	22.0	181.6	寺前No.29H20.11.12	基部破損
第９図-６	3	11号土坑	削器	礫石器	黄色風化泥岩	黄褐色	115.0	66.5	26.5	137.8	寺前No.30H20.11.12	先端部側より破損
第９図-12	3	―	削器	剥片石器	フォルンフェルス	灰色	68.5	98.5	11.5	63.1	寺前No.4H20.10.28	短辺に一部欠損あり
第９図-13	7	―	打製石斧の未製品	素材不明	砂岩	灰色	70.0	44.5	27.0	105.4	寺前No.32H20.11.12	基部破損部に二次加工痕
第９図-14	9	―	二次加工痕を有する剥片	剥片	フォルンフェルス	灰色	62.5	108.0	18.0	136.3	寺前No.12H20.10.28	
第９図-16	一括	―	二次加工痕を有する剥片	剥片	頁岩	灰色	59.0	81.0	28.0	129.5	寺前表土一括H20.10.16	

＊第10図に遺物出土地点を掲載。ただし、2・16については詳細な出土地点が不明なため未掲載。

その他、遺物図版未掲載の遺物については、ドットで位置のみを記している。

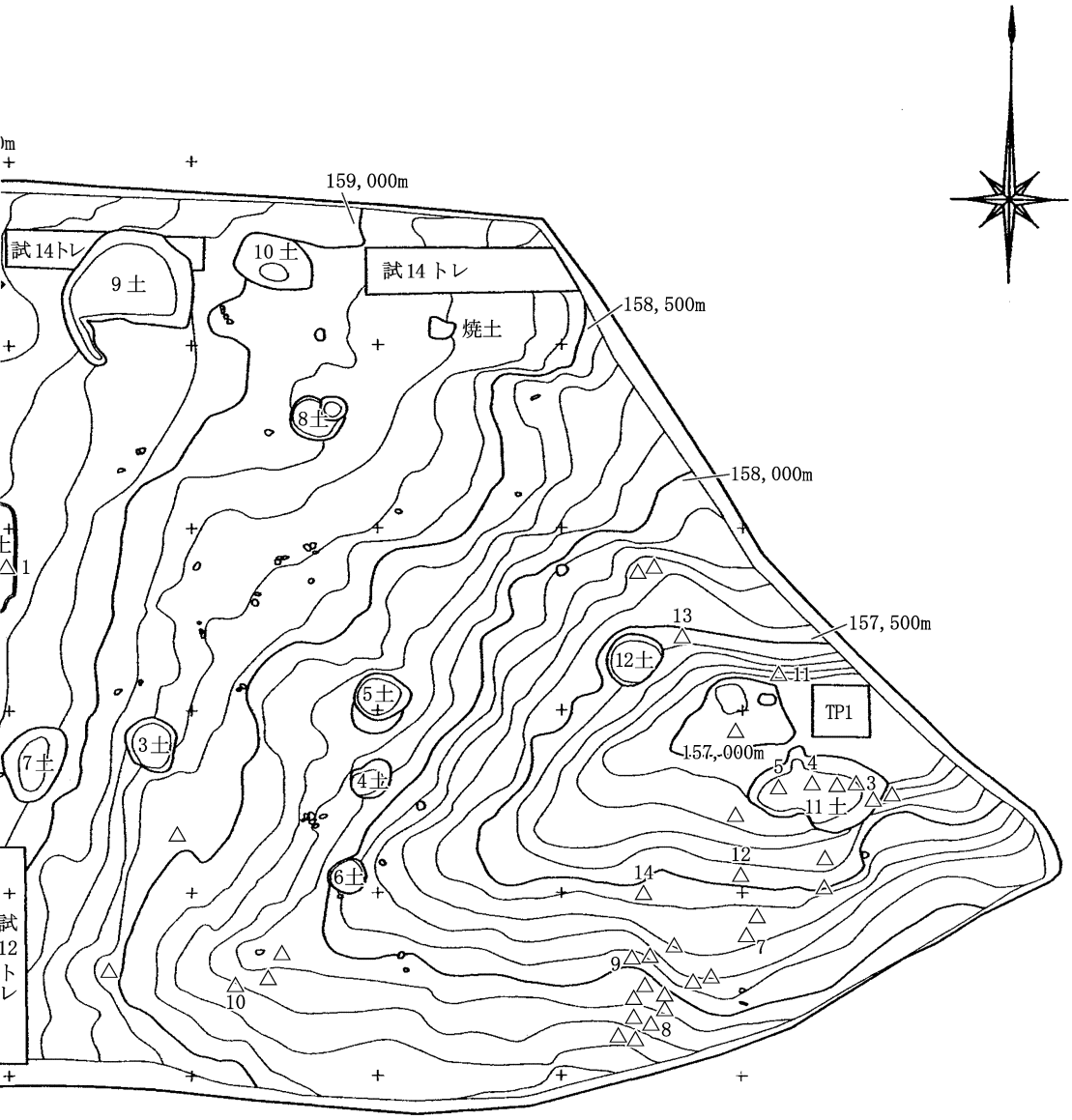


凡例

試 ＝試堀
トレ＝トレンチ
１土＝１号土坑
１溝＝１号溝
焼土＝焼土遺構
△ ＝点上げ遺物の出土地点
番号＝遺物図版計算番号
番号なし＝図版未掲載
※第９図-２については、10号土坑出土だが、詳細地点が不明なため未掲載

0 1 1:20

第10図　調査区の地形と遺構・遺物の位置


159, 000m
試14トレ
9土
10土
試14トレ
焼土
158, 500m
8土
158, 000m
1
13
157, 500m
12土
11
TP1
5土
3土
7土
157, 000m
5
4
3
11土
4土
12
6土
14
試12トレ
7
9
10
8
28m

写真図版

図版１　調査区全景（北＝右）

図版２　調査区内の状況１

調査前の状況（北西から撮影）

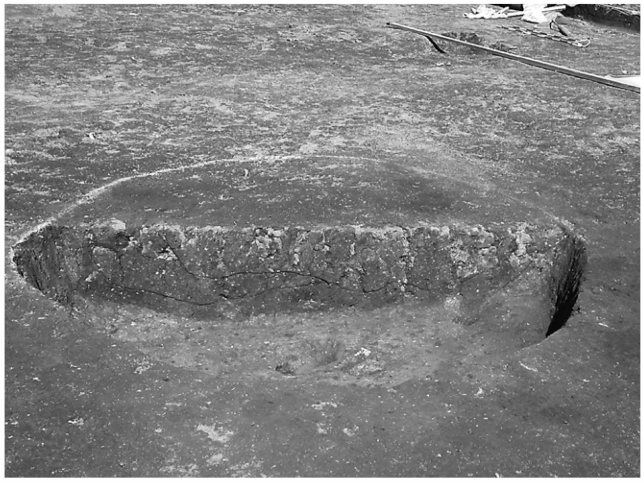
表土掘削状況（東から撮影）

図版３　調査区内の状況２

調査状況（西から撮影）

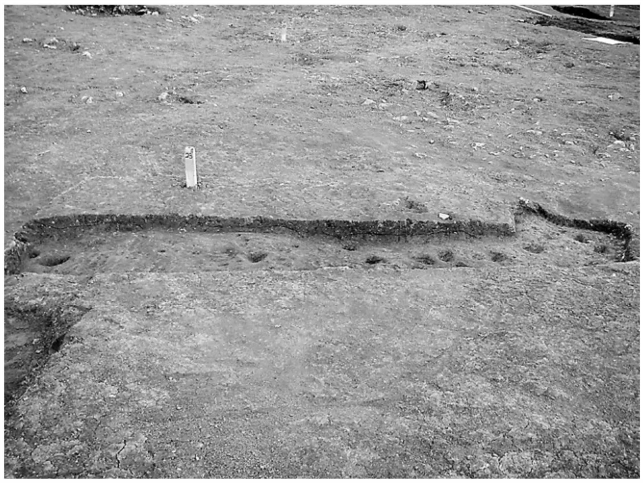
調査状況（東から撮影）

図版４　遺構１（１～３号土坑）



１号土坑（半截状況）

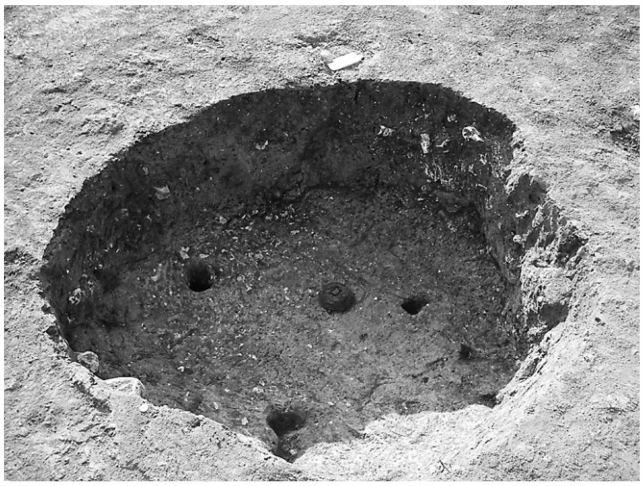
１号土坑（完掘状況）



２号土坑（半截状況）

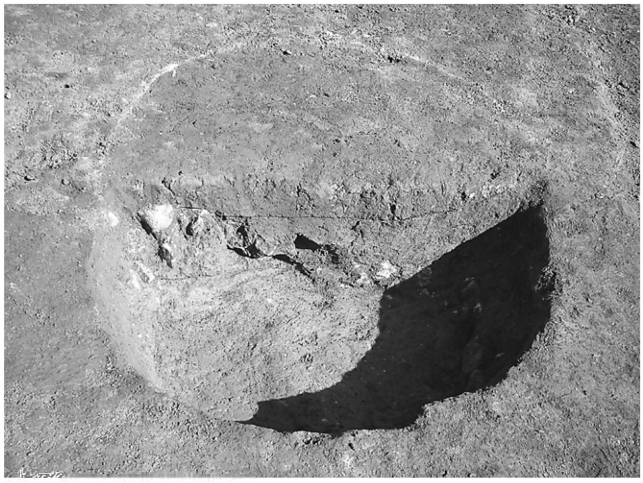
２号土坑（完掘状況）

３号土坑（半截状況）



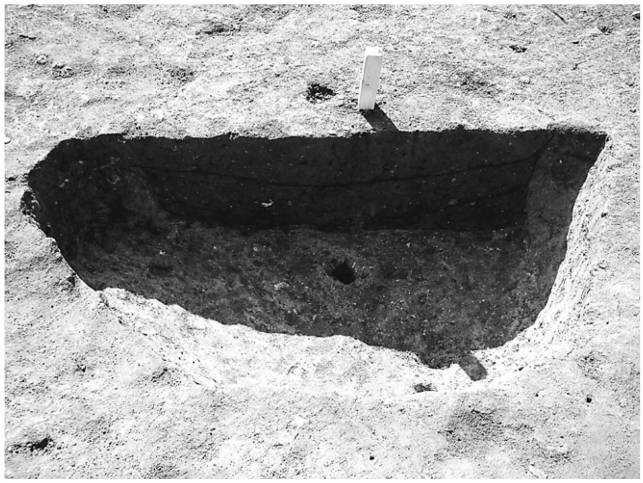
３号土坑（完掘状況）

図版５　遺構２（４～６号土坑）

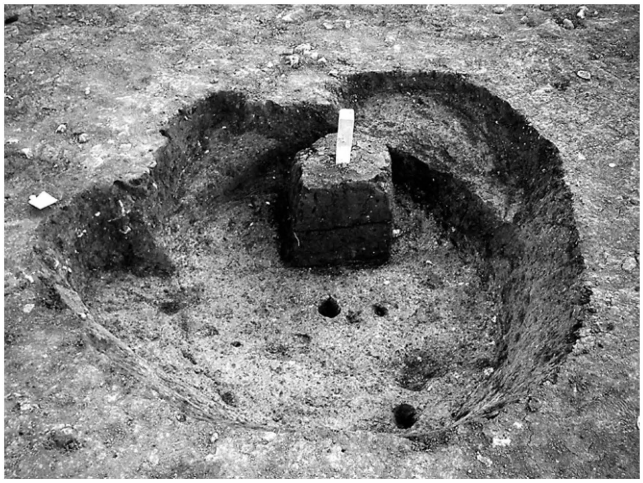


４号土坑（半截状況）

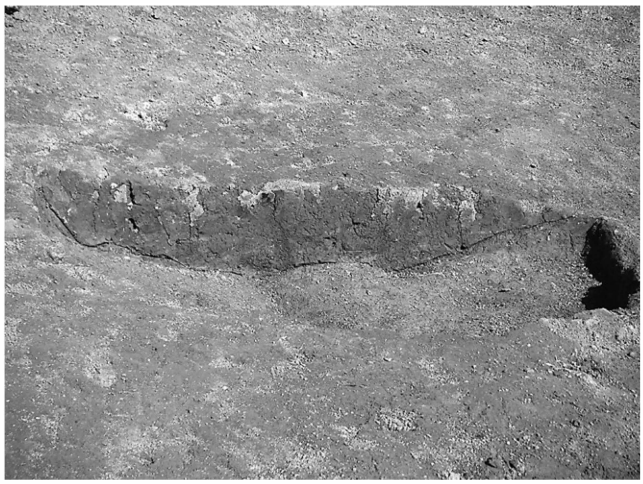
４号土坑（完掘状況）



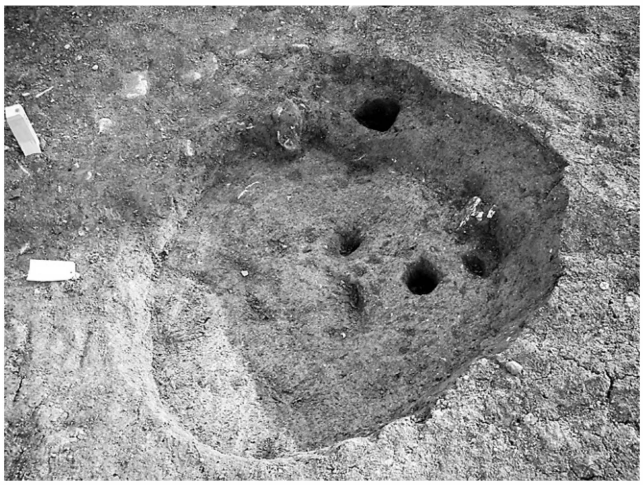
５号土坑（半截状況）



５号土坑（完掘状況）

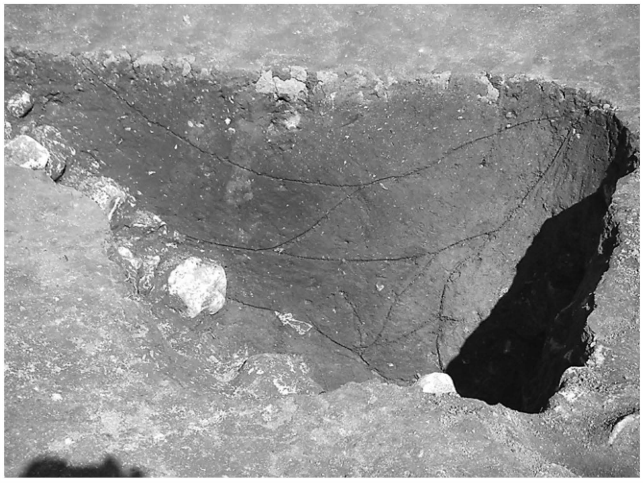


６号土坑（半截状況）



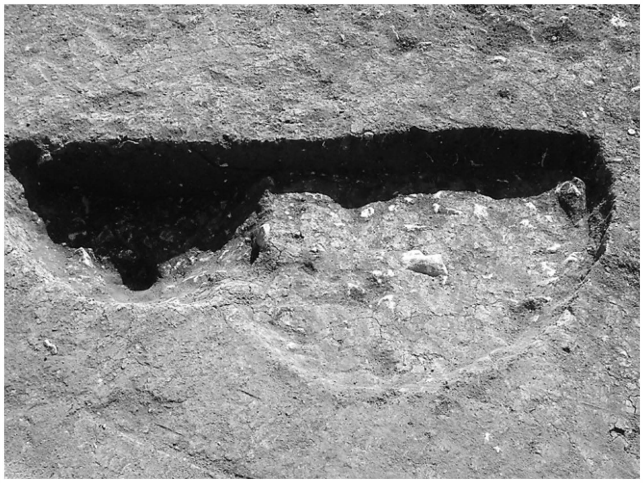
６号土坑（完掘状況）

図版６　遺構３（７～９号土坑）

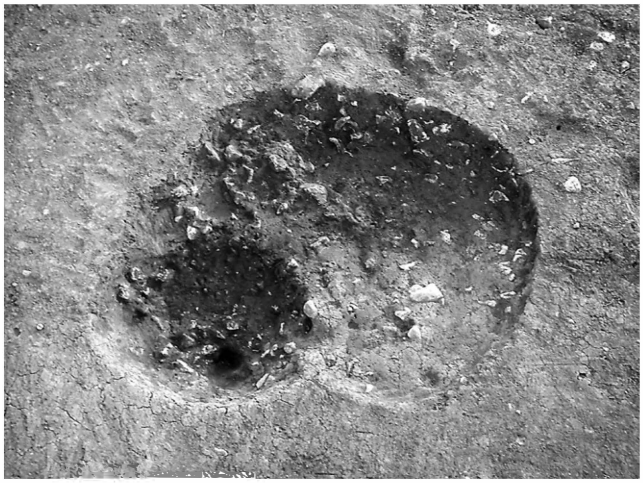


７号土坑（半截状況）

７号土坑（完掘状況）



８号土坑（半截状況）

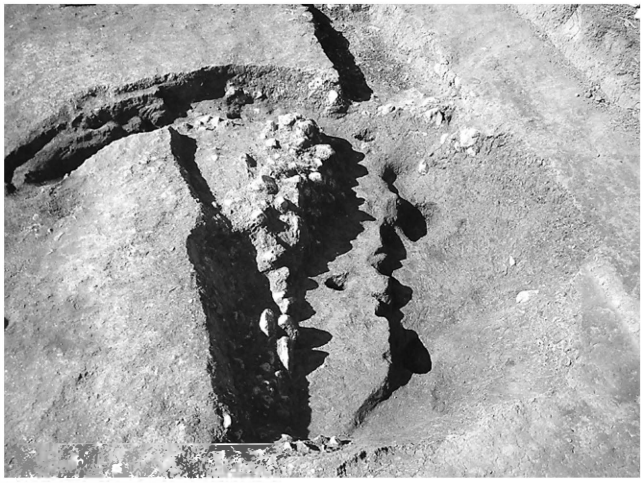


８号土坑（完掘状況）

９号土坑（半截状況）

９号土坑（土層セクション）

図版７　遺構４（９～12号土坑）



９号土坑（完掘状況）

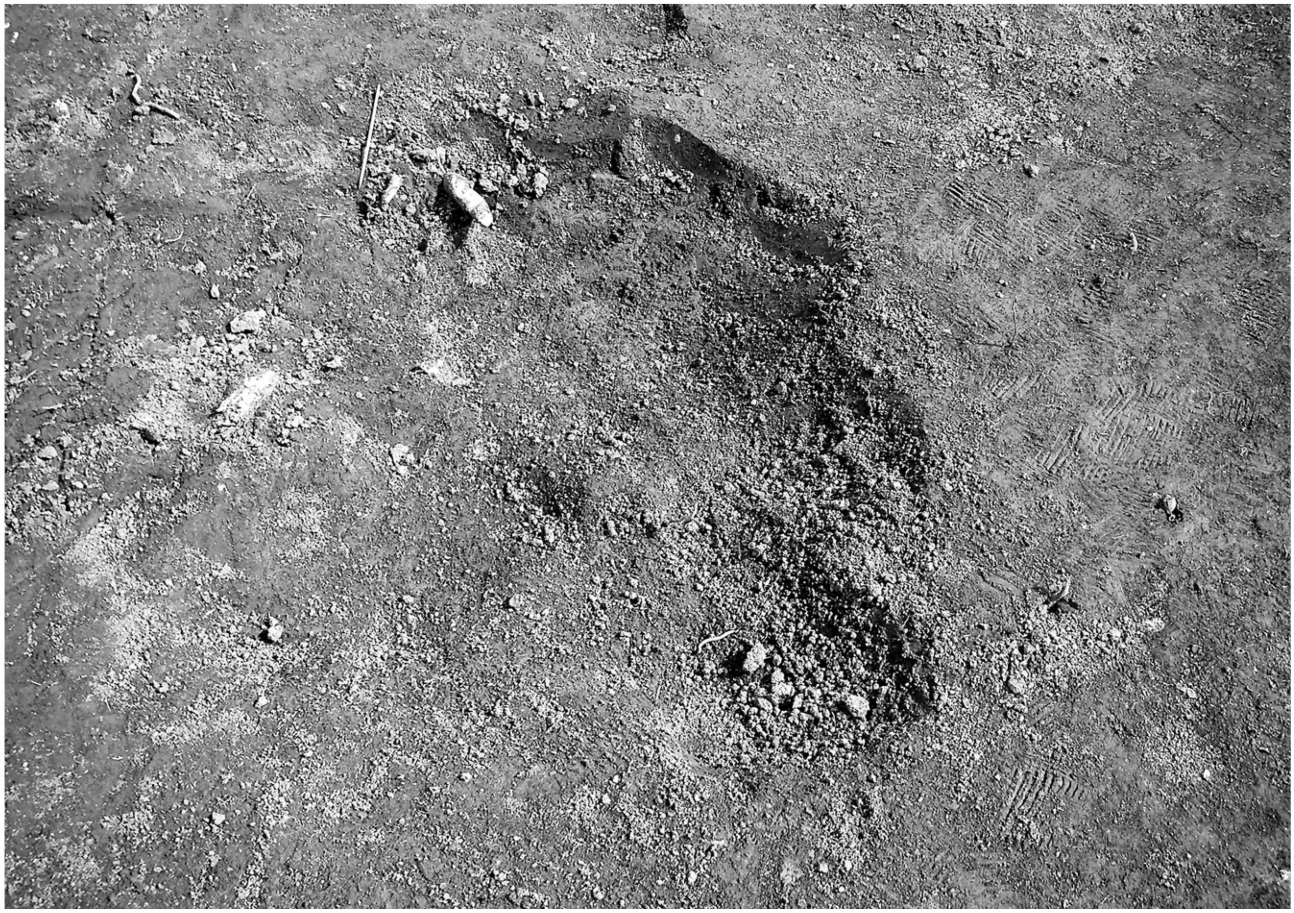
10号土坑（完掘状況）

11号土坑（完掘状況）

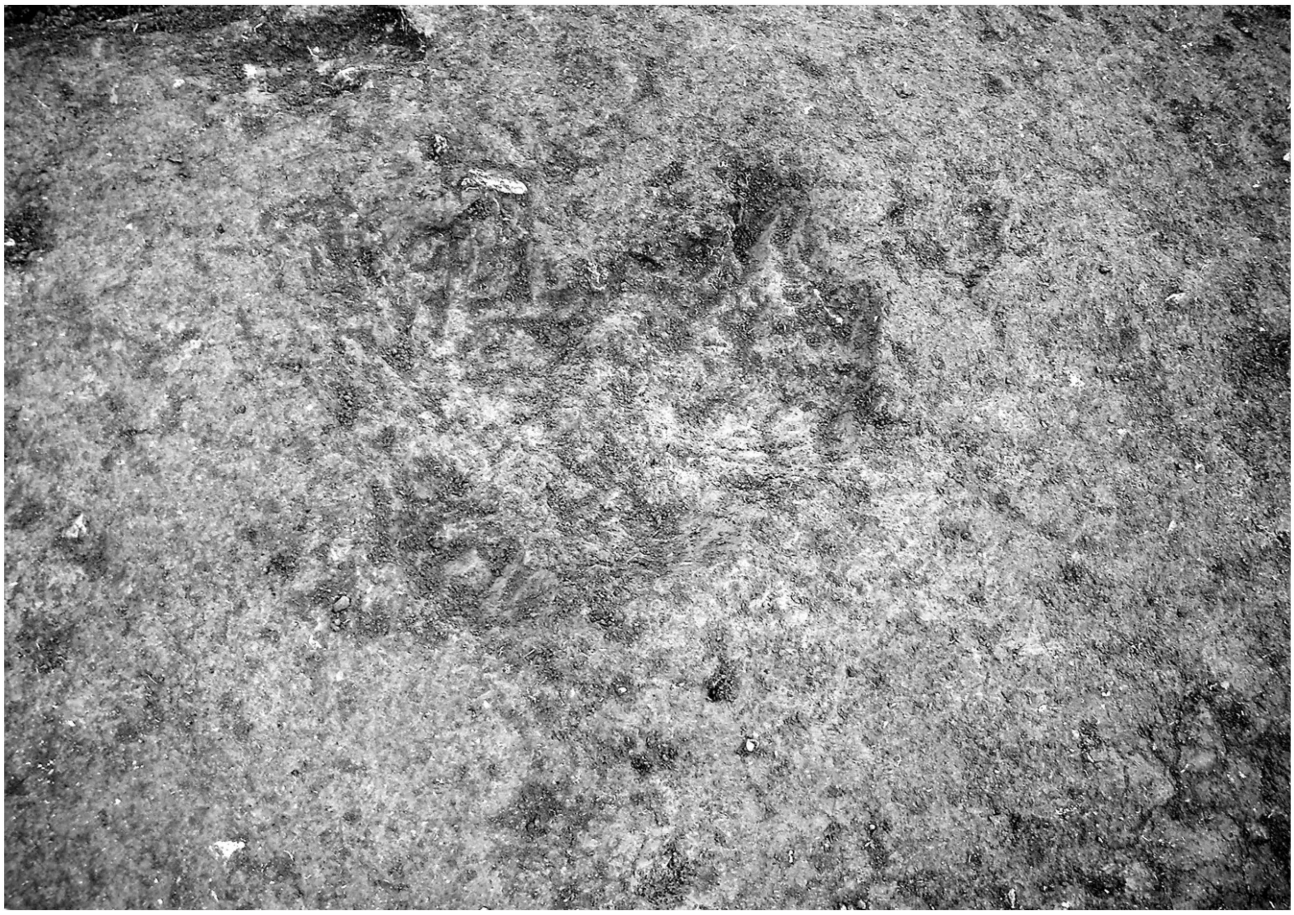
12号土坑（検出状況）

12号土坑（半截状況）

12号土坑（完掘状況）



焼土遺構（検出状況）

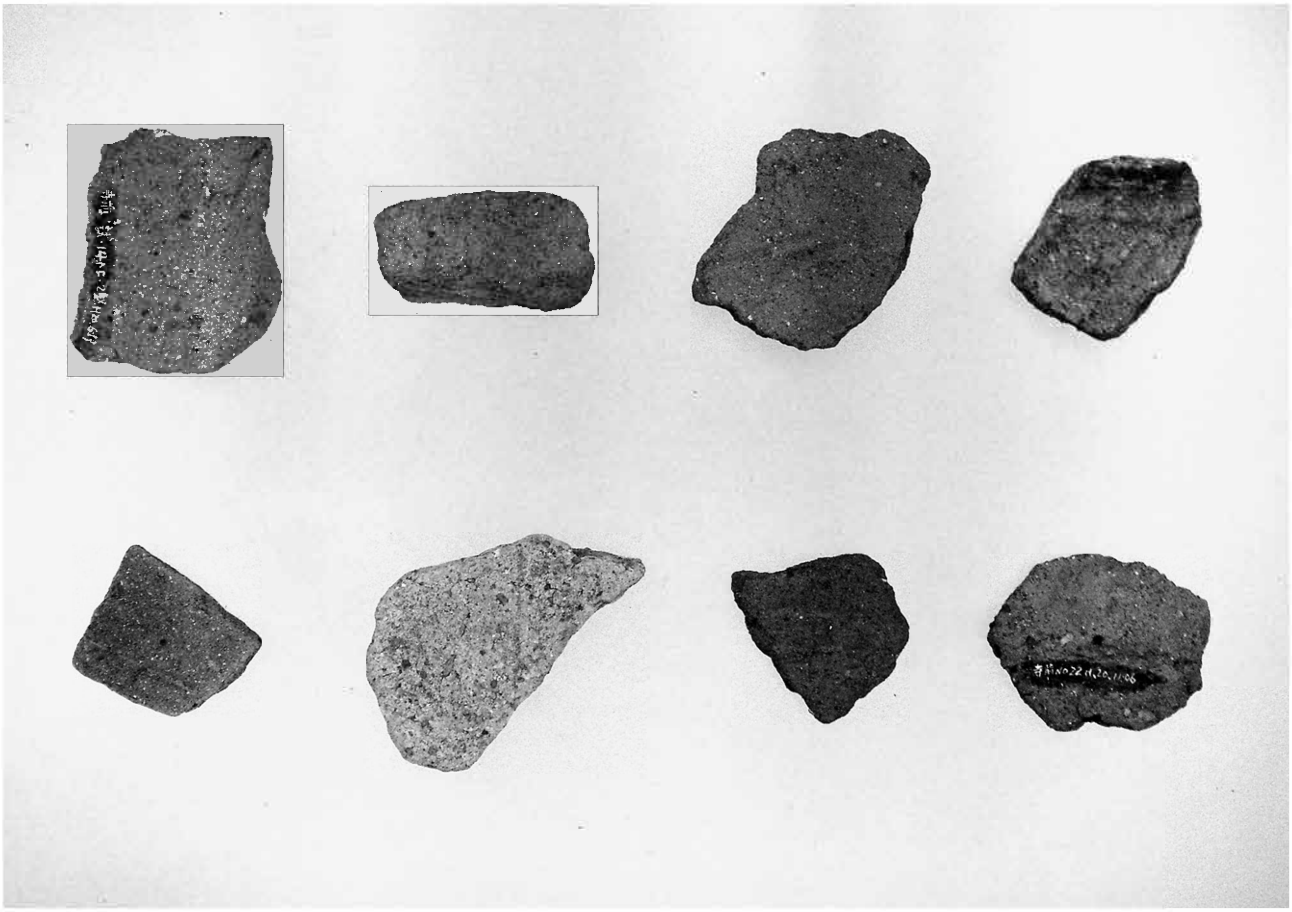


焼土遺構（完掘状況）

１号溝と２号溝（完掘状況：南から）

２号溝（SPA）の土層堆積

図版10　出土遺物１（縄文土器）



縄文土器（図版掲載遺物）

縄文土器（谷部出土の小破片）

図版11　出土遺物２（須恵器・陶器・石器）

須恵器と陶器の甕

縄文時代の石器

報　告　書　抄　録

ふりがな	てらまえいせき
書名	寺前遺跡
副題	中部横断自動車道南部インター建設事業に伴う発掘調査報告
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第２６４集
著者名	山本　茂樹・上原　健弥
発行者	山梨県教育委員会・国土交通省関東地方整備局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923　　ＴＥＬ　055－266－3016
発行日	２００９年　12月　25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
てらまえいせき 寺前遺跡	やまなしけん　みなみこまぐん なんぶちょう　なかの あざ　てらまえ　ちない 山梨県南巨摩郡 南部町中野 字寺前地内	366	366-0052	新 35° 18′ 09″	新 138° 26′ 48″	平成20年 10月4日 ～ 平成20年 12月9日	1600㎡	道路 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺前 遺跡	散布地	縄文・中世	土坑・溝・焼土遺構	縄文土器・石器・須恵器・陶器	調査区内に東西方向に谷状の傾斜

要約	本遺跡は、中部横断自動車道建設事業に先立ち発掘調査が実施された。遺跡のすぐ南には、有名な原間遺跡が存在している。調査された遺構の数は少なかったものの、見つかった縄文時代の土器片や石器などから本遺跡の周辺に小規模ではあるが集落の存在が想定されるものであった。

本書に関する情報

表紙	テンテンレザー	200kg
口絵・あらまし	コート	76.6kg
本文	書籍	46.5kg
写真図版	コート	76.6kg
抄録・奥付	書籍	46.5kg

体裁（標準）　50字×42行・明朝体・10.5ポイント

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第264集

寺　前　遺　跡

中部横断自動車道南部インター建設事業に伴う発掘調査報告

印刷日　２００９年　12月　20日
発行日　２００９年　12月　25日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根923
Tel 055-266-3016　Fax 055-266-3882
http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/index.html
発　行　山梨県教育委員会　国土交通省関東地方整備局
印　刷　港北出版印刷株式会社